
僕と彼女 僕と薬

ms01

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女 僕と薬

【Nコード】

N5018I

【作者名】

ms01

【あらすじ】

浮気されてる僕とその周りの人々の話。アンバランスな恋愛から始まる犯罪の世界。

気弱な僕

「おつかれさまでした」

僕は少し元気がない声でいつもどおり職場を後にした。仕事は運送業だ。

最近、彼女が浮気をしているのを確信したのだ・・・
職場を出るとすぐに同僚の太刀川が声をかけて来た。

「おい、コウちゃん待てよ。何を落ち込んでんだ？」

彼は一見すると人当たりはいいが昔、埼玉や東京で宝石関係で詐欺を働いていたヤツだ。

詐欺の名残かいつも副業的な事をやっているようで羽振りはそこそこいいが借金を相当貯めていて追われて来たとも聞いた。
その稼ぎで借金を払えばいいのにとよく思う。

あまり、信用はしていないが今の所は無難なオトコだ。

「何か悩みがあるんだろ？」

太刀川はあまり酒を呑めないので居酒屋への誘いは滅多にないが立ち話はその分好きな方だ。

駐車場の自動販売機コーナーで缶コーヒーを買ってこちらへ来た。

僕はタバコに火をつけると彼もタバコを吸い出した。

少し立ち話をしてると彼が言った。

「なんで、暗いんだよ。今日は朝はそんな顔してなかったぜ？」

心配してくれているのか野次馬根性か？まあ、関係ないが話のついでに事情を話した・・・

「なるほど、んじゃどうしても別れたくはないのかい？」

「だってさ、相手に取られると俺の負けって感じしないかい？」と答えると

太刀川は「お前の自尊心が優先で相手の女の子は二の次って感じも

するけど、まあ〜気持ちには分かるよ。」

彼はコーヒを飲むと続けて話した。

「経済的には多分相手が上だろうな〜」

全く嫌な事を言うなあ、とも思いつつ外れてはいない。

正直、彼女とは気持ちよりも体の相性がいいのは事実だ

勿論、愛情もあるのだが気の強い所がありよく喧嘩になるのも事実だった。

太刀川は続けて言ってきた。

「どうしてもって時は奥の手があるぞ、でもこれはなあ〜」

「何？」

「いやいや、どうしようもない時に教えてやるよ。」

もともと信用していないオトコの言うことなので僕もそれ以上は聞かない事にした。

僕はそのまま自分の車に乗りMDをかけた。

thug lifeがかかっていた。これを聞くとよく彼女と知り合った頃を思い出す。

職場を後にそのまま彼女の家へ……

はつきり言ってこんな僕をボロボロにしたのは彼女が始めてだ。

わがままで気まぐれ、理屈が通用しない。まさに感情の女王様と言った感じだ。

しばらくすると彼女の家に着いた瞬間すぐに分かった。

……彼女はいない……

木造二階建ての少し古い2Kに住んでいて駐車場から彼女の部屋の玄関がすぐに見える。

しかし、こういうアンバランスな状況では玄関をみただけ……と言っよりなぜか雰囲気に分かるもんだ。

悲しみが怒りが吹き上がるが何故かこの気持ちにも慣れてきた冷静な自分もいる。

とはいえ即座に携帯に連絡を入れた。

「留守番電話サービス．．．」

違う女の声だ．．．というか電源が入っていない。

．．．クソっ、もういいや、別れよ．．．と今まで何度も頭をよぎり、今回も同じ事を思った。

そのまま2時間近く彼女の家の駐車場にいた。

心の弱いオトコは「もしかしたら、買い物かも」などと下らん事を思い相手の言い訳を考えてあげるもんだ。

しかし、現実はそのなにごとに甘くない事は時間が証明している。彼女のいそうな場所を回りながら家路を辿った。

家に帰り、涙をギリギリでこらえながらコーラを飲み、テレビを見たりゲームをしたり本を読んだり．．．

しかし、携帯チェックは忘れていない。メールや電話もかなりの数を発信したが今だ返事が来ない。

結局、ソファで自分で自分を哀れみながら眠ってしまった。

「ぞろぞろ」

僕は昨日の事を考え引きづりながらも何食わぬ顔で仕事に就いた。

勿論、仕事中も何度も彼女への連絡は忘れてはいない。

『ピィ〜ピッピッ』

見ると警察が僕のトラックを止めている。あわてて止めると警察官が「車をその左側に止めてくれる?」と言った。

ああ、携帯のメールを打っていたのが見られたようだ。

「運転手さん携帯触ってたよね?、こんな大きな車でそれは危険だよ〜ちよつといいかな。」

免許書と車検証を要求され黙って出した。

免許書を渡しパトカーの後部に座らされ、携帯電話の事を言われたあとも

色々と聞かれあまりにも長いので

「おい、まだかよ？事件が合ったらSECOMに頼むからもう、俺に関わるなよ」

と言うと少しむっとした若い警官がにらみつけて何かを言いかけた、すると助手席の年配警官が

「はい、もういいよこれからはドライバーの自覚を忘れず安全運転でね。」

と言うと助手席の窓から手を出し後部座席を空けた。

僕は、トラックに戻るとすぐにメールを確認し少し落胆して運転に戻った。

今日のルートを終えて会社の駐車場について携帯を見ると彼女からの着信があった。

僕は全く気付かずに見ると・・・呼びだし時間1秒との表示。

何故か怒りより先に安心感があった、がすぐに怒りがわいてくるがとりあえず電話をかけた。

するとすぐに出た。僕は怒りに任せて「あゝもしもし！！あのさあゝ」

と言った瞬間更に怒った声色で彼女が

「もしもし、何あのメール？私はずっつと京子ちゃんの家にいたんですけど！」

・・・でた・・・嘘見え見えなのに、逆ギレで彼女の物語が始まった。

この物語は多分、彼女の作ったストーリーを大声で聞かされて一方的に電話を切られて終わり、その後すぐにかけても電源が入っておらず、2〜3時間後にこちらが低姿勢でかけないと終わらない理不尽な展開だ。

んで、調子良く話が出来るときは浮気相手が相手してくれない日だ。

詐欺師の知恵

彼女はやはり私の話など聞かずに電話を切った。

が少し安心してトラツクを降りて伝票を事務所に届けに行った。

通り道で休憩室を覗くと太刀川が先に戻っていて「よお！おつ」

と手を挙げたので僕もそれに返した。彼は相変わらず缶コーヒーとタバコを手にかけていた。

伝票の処理をした僕は休憩室に戻りコーラを買い好きではないが太刀川の前の席に座った。

すると、太刀川はすぐに昨日のテレビ番組の話をして来た、僕は内心・・・どうせ彼女との話が聞きたいんだろ？・・・

と思ったが「いや、昨日は一度もテレビを見なかったんだ。」と答えると太刀川は「彼女の事か？」と言って来た。

「まあーね。でもさつき少し話したから今は少し安心したよ。」

「そうか。良かったな、でもさどうせまた浮気されるぞ。」

「余計なお世話だぞ、ってか関係ないだろ？」僕は少しムキになつたが彼の言う通りなのは承知だ。

太刀川は黙ってコーヒーを飲んでいて・・・沈黙が少し続き僕は少し悪いなあと思った。

・・・そうだ、あれ聞いてみよう・・・

「ねえ、昨日言ってた奥の手ってなに？」

すると太刀川は笑みをこらえた様な顔を一瞬したがすぐに真顔で言った。

「お前、ロック好きか？」僕は答えた「はあ？ああ。好きだよ」

「だよな、結構話題に出して話してるしな、彼女はどうか？」

「うん、彼女も好きだよ、まあ俺とは好きなバンドが違うけどな。」

「彼女は真面目か？・・・いや、真面目と言っかいわゆる常識的な

ところはあるだろ？それと反対の部分ってのはあるか？」

「例えば？」

「うーん、反逆的と言うか、ロツクで言うパンクみたいな所だよ。常識的な真面目な部分と法律なんてどうでもいいや、ってアナーキ的な部分だよ」

「あるある、ってかある意味では二重人格かも。」と言って僕は笑った。

すると太刀川は「んじゃ、これをお前らにやるから試してみるよ。」と言ってセブンスターのタバコの箱をくれた。僕は中に指を入れた、するとなにか小さなビニールが入っている。

出してみるとすぐに太刀川が「バカ!!」と言って慌ててそれを取り上げた。

「人に見られたらどうするんだよ?」「なにそれ?」と聞くと少し小声で

「いいか、物はいいから使い方と注意点だけ言うから覚えるよ、まず耳かき1杯〜3杯程度をアルミの上に棒状においてな、下からライターであぶれ。すると煙が出るからそれを短く切ったストローで思いっきり吸い込むんだ。んで、何も感じなかったら少しづつ量を増やせ」

俺の質問には答えずに太刀川は喋った。しかし、僕はそれで何かをさとった。

「どうなる?」と聞くと「まあ、そのうち彼女は相手と別れる。」僕は何か分かったが、好奇心が手を貸して興味津々で彼の話聞いた。

太刀川が続けた「いいか、これが効いたら絶対に出るなよ、それと一晩は寝れないけど心配はするなよパニツクが一番怖いからな」

僕は「体になにか起こったりしないか?」すると「ない。しいていうなら少し痩せる。」

そう話していると彼が小さいビニールを僕の手へ渡した。

「ねえ、これ金は?」気が弱いと言うかお人好しの僕は聞いた「そんなくらの量ならやるよ。」

というとは彼は休憩室を出て事務所へ向かった。僕もタイムカードを押しに事務所へ向かった。

駐車場から彼女へ電話してみた。

多分、昨日は浮気相手とお泊まりして来ているので相手が嫌がつて今日は会ってくれないはずだろう、などと思いながら呼び出し音を聞いていた

「もしもし」

さっきの話を続けるのか？と少し虚勢を張った声で彼女が出た。

「ねえ、面白いものあるけど遊んでみない？」

「何？ゲームとか新しいパチンコとか？」

「いやいや、ほら君の好きな系統で昔、興味本位で本買ったじゃない。あれだよ？」

「はあ？それって薬物系？」さすがは反逆の女王だためらいもせず
に答えて来た。

「たぶんね、何かはよく聞かなかったけどそうだと思う。」

「大丈夫？あれってヤバイ混ぜ物とかあるらしいよ。」

「それは心配ないと思うよ、使い方も聞いたし、何かあっても明日
休みだから一日寝とけば復活するんじゃない？」

「ああーまあいいけど。」

「んじゃ仕事終わったからそっちいくね、いい？」

「いいって、何で聞くの？明日休みだし家に居るに決まってるんじや
ん。」

「．．．．．なんだよ、いちいちつかかるなよ．．．．．と思い
ながら「ああ、いや京子ちゃんとかくるのかと思ってさ。んじゃ後
からいくね。」

「ガチャ　電話は無言で切れた。」

僕は、仕事場からそのまま彼女の家へ、すると彼女は洗濯をしてい
たようで「ちよっと待って、先にこれたたむから。」と言いシャツ
も手に持っていた。

すっかり昨日からの出来事を忘れた様に玄関を開けた。

早速ビニール袋を見た。塩？砂糖？何とも言えないものが少しだけ、底の方に溜まっていた。

「ねえ、ストローとアルミ箔ちょうだい。」と言うと「まってっ、いまこれたたんでるでしょ。」

ぼくは黙って立ち上がり自分でキッチンから取って来て鋏でストローを半分くらいに切りその先で少し取ってアルミ箔の上において下からライターであぶった。言っていた通りに煙が出て来たので吸った。．．．．．そのまま深呼吸をしたが、何も起こらないので何度か繰り返ししてみた。

すると、彼女が僕の前に座って「ああ、もうやってるの？どう？どう？」と聞いて来た。

僕は息を止めて目をつぶって見せると彼女はアルミ箔に少し取り出し下からあぶり同じ事をしだした。

僕らはしばらく同じ事を無言で繰り返ししていた。

彼女に「どうよ？」と聞くと「めまいが少ししてさあ、それでなんでいるの．．．．．」何故か彼女が猛烈に話をしだした。

僕も3時間以上彼女の話聞いていた．．．．．

彼女の表情が明るく見え、目もきよろっとしていてかわいい．．．．今更だがそんな事に気付いた。

彼女も僕の顔を見てキスをして来た。僕は舌をからませ胸をもみだした、すると彼女はいつもよりも少し大きく色っぽい声を上げだし、僕のズボンの上から触りだし「ねえ、ちょっと立って。」というと僕のズボンを下ろし始め舌を使って舐めだしくわえた。．．．．．それから1時間、2時間．．．．．いつまで続くかは分からないが僕はいつまでも続いて欲しかった．．．．．その後、2人とも異常に汗が出ている事に気付き横になり．．．．．

時間と体

僕らは異常な興奮と感度と喜びに近い広い心を入れて、僕は彼女、彼女は僕だけしか見えない狭くとも幸せな世界にいた。

僕らは同時に想像を絶する様な想像力と引き換えに羞恥心を忘れきっていた。日常からは考えもつかない程の変態的な行為を10時間以上も繰り返していた。

と言うより、腰を降り出して既に6時間．．．まだいかない．．．しかし、それでもいつもの10倍位の気持ちよさだ．．．彼女も勿論、同じようだった。彼女に僕は「外でしょう．．．」自分でもびっくりする様な事を言っていたが彼女も「うん、じゃ服だけきるね．．．」

とあっさり承知した。

太刀川に言われた「外出禁止」など忘れてしまっていた。日頃しない様な激しい体位を色々試したり近くの公園のトイレでやってみたり、気付けば休日も昼間になっていた．．．

まだまだイってないが薬をしに家に戻った．．．その後はまた布団の上で同じ事を繰り返し．．．遂にイッた。

初めていく時に声を出してしまった。

気がつくともう夕方だ．．．

2人とも、時間の概念が無茶苦茶になっており正直、少し休みを無駄にしたかもと思った。

それから2人とも今度は無言でそれぞれが別の事を黙々と始めた．．．僕は家中の埃を裸のまま拭き取り始め彼女は台所を片付け始めた。

2人が各々、各自の仕事の様に作業を始めて4時間がすぎ辺りが暗くなっていた。

するとまた、薬を始め．．．抱き合い始めた。2回目にとのく
らいお時間をかけたかはもう分からない。
終わった後は2人とも寄り添う様に、とても仲が良くなっていた。
考えるとほぼ丸々一緒に居たのだ、濃厚な時間はいい薬になったの
かもしれない。
結局そのまま、2人で無言だが幸せな気分朝までずっと一緒に布
団に入っていた。

しばらくすると携帯の目覚ましがりんりん！とした。

なんと、もう月曜日の朝だ。

彼女は横で裸のまま僕を見つめていた。

「おはよう．．．って寝てないか」といって微笑んだ。

「何か飲む？」

「んじゃ、コーヒくれよ。目は覚めてんだけどね。」

「今日の仕事大丈夫？居眠り運転とかしそうだったら絶対、車は止
めて電話してね。」

いつになく彼女は優しくかった。

「うん、今日は仕事中はこまめに電話するよ。」
と言ったあと続けて言った。

「ごめん、携帯で警察に止められたばかりだ、注意して止めとい
た方がいいかもね。」

彼女がキスをしてきた、そして続けた

「ああ、テレビでも言ってたけど薬した人って警察はすぐに気付く
らしいよ、コウちゃん今日は無理しないで。」

「ああ、そうなの？んじゃ早く帰ってくるよそのあと店に送るね。」

「うん、でも私、今日店に行く前に京子の買い物について行くから
夕方前には出てるかも。」

と言うと何やら鞆から取り出しそっと鍵をくれた。

「無くさないでね。」

正直言って嬉しかった。

彼女は不景気のさなか月々金まではフルに店に出ているが土曜日は予約のある時や他の子が休みの時などしか店に出ていない。

また、浮気相手に呼び出された時は無断欠勤もたまにあったようだがお客さんからの評判は悪くはなかった。何とも器用な女だ。

僕はコーヒーを飲み終えタバコの火を消すと彼女にキスをして「行ってくるね」と言い残し会社へ行った。

彼女の家からだ少し遠いので早めに出ないといけないのが難点だが鍵をもらったことの方がそれ以上に嬉しかった。

会社につくと、いつもの光景だ。

タイムカードを押してコーラを買ってスポーツ新聞を読んでいた。

疲れているのか薬のせいかわからないがコーラがおいしくない、それに対しいつものタバコがきつく感じ徐々にクラクラとした。

不景気で最近は朝一発目の配達現場がない事もあるし、どうかすると一日会社で洗車や倉庫整理と言う日もある。

流石に月曜日の朝に仕事がないと言う事は少ないがそれでも不景気なのはドライバー達は肌で感じている。

「さて、朝礼を始めるか」社長が大きなこえで入って来た。

特別なにということもなく10分程度で終わった。

僕は事務員のおばさんから伝票をもらい営業の波多と少し今日の打ち合わせをしてトラックに向かった。

寝ていないせいか、少し体が火照っている。出発前に彼女にメールを送った。

すると、2、3分で返事が来た。「今からお風呂に入って、少し寝てみるね運転気を付けてね」と色々な絵文字とともにハートマークがついていた。

太刀川のいう通り彼女はそのまま浮気相手から離れて行くかもしれない……そう思った瞬間だった。

トラックを出発させようとした時、すれ違いにトラックへ歩いて行

く太刀川の姿が見えた。

一瞬では合ったがヤツもこちらを見てニヤツとして手を振った。

「信用はしてないがさすがは詐欺師だな」と気付けば言葉にしていた。一瞬ヤバい！と焦ったが誰もいないのに安心した。

午前中の配達を終え昼だ。いつもなら弁当とおにぎりをコンビニ買って食後は少し昼寝なのだが今日は仕事以外では車から降りたくない。

そもそも、腹が減っていないのだ。これでは体がもたないと思い薬局の前で駐車し栄養ドリンクと水を買ってトラックにすぐ戻った。ドリンクを飲み終わるとタバコをすいながら昨夜の事を思い出し少し興奮していた。

当たりをミラー越しに見回すと誰もいない．．．．．思わずトラックの中で、自慰を始めた。

1時間？いや2時間くらい経つたらうかフツと我に帰り時計に目をやった。

「やばい！」思わず声がでた慌てて伝票を確認しすぐにトラックを出した。

夕方、少し時間を押したが無事に事務所へ帰り着いた。

すると駐車場に部長がよってきて少し不機嫌な顔で見ている。

「お疲れさまです。」と少し愛想笑いをしながらいうと怒った様な声で

「中央区の現場に遅刻したろ、さっき監督さんに営業が電話したら怒られたそうぞ。」

「すいません、お腹の調子が悪くて．．．．．」とつさにベタな嘘が口から出た。

「どうでもいいんだよそんなの、大体よく何故先に電話でも入れないんだ？お客さんにかけてぶらいのなら事務所に電話して報告すればいいじゃないか。」

「はい、すいません。」．．．その後少し説教をされたが自分でも当然だと思ってもう一度頭を下げ事務所に行った。

もう、既に帰宅した連中も居るようで電灯が半分消えていた。明日の伝票を確認していると太刀川が帰って来た。

「いや、午後からいきなり県外だったよ。波多がサバケね〜からって俺たちが迷惑するのはどうかと思うぜ。」

と僕に言ったのか事務員に言ったのか分からないが大きな声だった。僕が伝票を確認．．．というかただぼんやり見つめていると太刀川はさっさと事務所をでた。

はっ！とした伝票を10分程度だが見つめていた。いつもなら30秒も見ないのに．．．．．

少し自分の脳がおかしくなってるんじゃないかと心配して僕も事務所を後にした。

女心

僕は仕事を終え車を自分の家に向かわせた。着替えやちょっとした小物を取りに帰る為だ。

家に付きまらずは彼女へのメールを打った。すると電話がかかって来た。

おお！と思い電話を見たら相手は太刀川だった。体も少し疲れていて今は彼女以外とは話をしたくなかったので無視して着替えなどをバッグにつめた。

よく考えると汗まみれのまま2日も風呂に入っていない。「こりゃ、ヤバいかもな。」

せっかく彼女との仲も良くなりそうなのにこれではイメージダウンだ。

服を脱ぎ洗濯かごへポイと投げて風呂場へ。

風呂場の前を通ろうとした時に何気なく鏡に自分が映った。えっ？これ俺？？

そこに映ったのは2日前からは確実に痩せた自分の姿があった。

冷静になり鏡に顔を持って行くと頬も少しこけていて大きなニキビがいくつか出ていた。

このニキビはカッコ悪いな・・・と潰してみたら、勢い良く吹き出した。

しかし、まだ何か中に残っている様な気がしてならない。同じ所を何度も潰していた。

当たり前だが潰したニキビからはもう何も出てこない。が今は脳がショートしている状態だそんな判断も出来ずピンセットを持ち出した。

普段なら痛いと思える程の力をいれてニキビを潰していた・・・気が付くと裸のまま数時間もニキビを潰していた。

顔はぼろぼろで血だらけになっていた。それに気がついた時には既に手遅れだった。

「いかん、俺はなにやってんだ！」冷静になり自分の顔を見て少し呆れながらもべとついた顔をその場で洗い風呂へ入った。

体を洗いながら湯船にお湯を張る。まだ半分程だったが洗い終わると即座に風呂へ入った。

何とも気持ちがいい．．．全身の疲れが一気に抜けて行くようだ。「はあ〜」思わず息が漏れてそのまま目をつぶった。だんだん体の力が抜けて行き首から上がふらふらしだした。

ポチャ！

顔を湯船のお湯につけて目が覚めた。「ああ、寝てた。」

お湯も冷めて今や水になっていた。「うお、これじゃ風邪引くぞ」と自分に言い聞かせながら風呂から上がり体を拭いた。

服を着て彼女の家に移ろうかと思いついて携帯を充電器から取り上げてみるとメールが入っていた。彼女からだ。

もう家に着いたと知らせて来ていた。「え？何時だ??」「ふと時計を見るとなんと深夜の3時。

時間を無駄にしたようでショックを受けた。メールも今から1時間程前に着ていたようだ。

「今夜はいくのをやめよう、彼女も今日はゆっくりしたいだろう。」とつぶやき彼女にお疲れメールを送信した。

中途半端に目が覚めて考えたら何も食べていない。お腹がすいた訳ではないが確実に昨日よりは食べられる自信が有った。

下のコンビニへ弁当を買いに出る事にした。

しかし、この顔では非常におかしい．．．だが何か食べとかなないと明日は確実に持たない。

意を決してコンビニへ．．．幕の内とお茶を選びレジへ「お弁

当は暖めますか？」

いつもの問いに「はい」と答えた。会話は少ないとはいえよく顔を合わせる店員だやはり何か気になるようでこちらをチラチラみている。

会計を終わらせると早足で自宅へ戻った。

「やっぱり、少し怪しいよな。明日会社どうしよう．．．」

そう思いながら部屋に入り弁当を開けた。

ご飯やおかずの香りが辺りに立ちこめたが食欲はそそらない。

先ほどまでは食べれる自信があったがいざ目の前になるとそうでもなかった。

「はあくでも少しでも食べとかなきゃな．．．」しびしび口元へ運び食べた。

すると食べた物が食道を通過し胃に行くのが分かった。完全に体が弱っていたのだろう。

そう思うと無理をしても食べなければと思い全部食べた。食べ終え一服しようとタバコを探しながら彼女は大丈夫なのだろうか？と気になった。

しかし、こんな時間にメールや電話をしてもし寝ていたら逆に起こしてしまって良くないな～と思いつつタバコを吸っていた。吸い終わると今度はに睡魔が襲って来た。座ったまま、頭をまたふらふらしたと思いきや倒れた様に眠りについた。

携帯の目覚ましがなった。この音だけは条件反射で目が覚めてしまう。

うわぁ、眠いよ．．．今日はダメだ．．．以外と仕事に真面目なのだが流石に起きる気力を睡魔が押さえつけている。

しかし、本来の真面目さというか気の弱さが電話だけは会社に入れなくてとは行動を起こさせる。

今は時間が少し早く会社に電話しても誰もいないだろう。そう考え、社長の携帯へかけた社長は朝が早くいつも電話の電源を入れている

のを知っていた。

更に、社長は温厚な上にめったに怒る事がないからだ。

「もしもし、おはよう。どうしたんだこんな時間に」

「すいませんこんな早くから、実は昨日ですね、家の階段で顔から落ちちゃいまして全身が痛いんですよ。」

「そうか、仕事はできそうか？」

「大した事はないのですが顔中傷だらけで目元も腫れてて片目が開きにくいので運転がどうかとおもいました。」

「そりゃいかな、大事がなくて何よりだが今日は休むか？腫れも一日じつとしてればひくだろう。」

「はい、すいません。明日には直ってると思います。」

「そうだな。では今日はゆっくりするといい。」

「ありがとうございます。」

何とか言い訳をし顔のフォローも先に手を打っておいた、安堵の気持ちにまた眠ってしまった。

その後、昼過ぎに目を覚まし携帯を見ると彼女からのメールをチエツクした。

来ていない。僕がこんなに浮かれた気持ちなのに彼女は何も思っていないのか？それとも寝てるのかな？

そう思いながら水を飲んだ。

カーテンを開けるとものすごく眩しかった。

電話しようかメールしようか考えたが寝てるかもしれないなあ、せっかく鍵ももらった事だし行ってみようかな。

車の鍵をとり昨日まとめたバッグを片手に家を出た。

隙間

平日にさぼったのはいつ以来だろうか？高校生以来かな？いや、さぼりではない。

一応は怪我してるからな．．．でも誰もニキビを潰してこんな顔になったなんて信じないだろうな。

誰に聞かせる訳ではないが気が弱いオトコとはそういう者だ。

お昼を過ぎるとさすがに車も熱い。季節は秋なのだが車内はムツとした熱気が漂っていた。

「どうしよっかなあ、何か食べ物を買って行ってやるうかな」

彼女の体調も心配だし今晚も店に出るのならなおさらだ。車の窓を開けたままにしてコンビニへよった。

昨夜の店員は交代してオーナー店長の夫婦がレジにいた。

手軽で栄養のとれそうな物を探した。

陳列棚をしばらく探すと『ウウダー』

「？」

ゼリー状の栄養補給食だ。

「おお、これいい」

彼女は普段から余り食べる方ではないので弁当はきついかなあ〜と考えていたのでちょうど良かった。

飲み物はポツカリスエットという、スポーツ飲料を選んだ。どちらも手軽に栄養補給が出来ると思ったからだ。

運動といえば運動をそれも過激に24時間休憩無しのような状態で行っていたので間違っではないかと言えはそうかもしれない。

あと牛乳180mlの小さなパックを買った。

彼女は牛乳を飲まない。これは自分用だ。

昔、人間にはタンパク質が一番必要だと聞いたので用心の為に飲んでおこうと思ったのだ。

車に乗り込み彼女の家へ向かった。

途中、渋滞気味で少し時間がかかっている。

平日の昼過ぎだ当たり前ではあるが仕事で渋滞を日常的に経験しているので休んでいる時の渋滞には少し苛立を感じる。

車内でここ数日の事を考えた。先週の今は普通に仕事してたよな。

同じ渋滞を経験していただろうが状況が少しでは有るが確実に違う。この少しのズレがこれから酷くなって行くのだろうか？と少し心配をした。

それはそうだが、3日前の少量の煙を吸ってから確実に生まれて始めての経験をしたのだ。

しかもそれは不思議な力や世界観を与えてくれたのだ。同時に自分の体のタフな事にも驚いていた。

「人間ってすごく強く出来てるんだな。」

これは過信かも知れないとこの時は思いもしなかった。

しばらくすると彼女の家に着いた。

駐車場に車を止め軽い足取りで階段を上った。チャイムを押さずに鍵を開けて中に入った。

冷蔵庫に買って来た物を入れると寝室を覗いた。

・・・彼女はいなかった。

「あれ？」

店に行くにはまだ早い時間だ。

感覚が一気に高ぶった

「オトコだ」

今までも、火曜日はよくいきなりいなくなった事があった。

それに薬の効果が残っていれば他のオトコを求めて出て行くのは自

然な事ももしれない。

自分だけが愛情を感じているつもりだった。

いつもなら駐車場から彼女の家を見て居るかそうか分かっていたのだが体を酷使した後だ、ましてや薬が体内から抜け始めて軽い虚脱感があるのだ感も鈍っているのだろ

また、いつもの様に悲しみと怒りが吹き上がる。しかし、今回は相手の言い訳を考えてはいない。

すぐに太刀川に電話をした。

「もしもし、太刀川？」

「おお、コウちゃん。大丈夫か？」

「ああ、大丈夫それよりさ例のあれまだある？」

前回もらった物は量が少なくそれを素人2人が何も考えずに全て使ってしまったのでもう、残っていない。

「いや、もうもってない。」

「ああ、そう。そうりやそうだよ。ごめんごめん」

少しだけ良かったと思った、しかし残念な気持ちもあった。

太刀川は続けて喋りだした。

「でも、コウちゃんなら知り合いだし信用してるからちょっと待ってて、手元にはないけど友達に言えば用意できるよ。」

太刀川はうさくさい事を平然と言った。しかし、お人好しオトコはこれを聞いて少し彼を見直した。

「ええ、無理しなくてもいいよ。」

「ああ、いいよそれにコウちゃんの事は言わないからさ。こないだのは少なかったから物足りなかったんじゃない？」

そんな事はなかった、むしろ十分すぎるくらいに効いた。初めての人間には耐性（免疫の様な物）がないので少量でも効くのだ。

しかし太刀川はそれを知っていて言った。

「いや、こないだはすごく効いたよ。良かったよありがとう。ただ、もう無くなっちゃったんだ。」

太刀川は今日の休みの理由が何なのかは最初から分かっていたので

怪我の事など聞こうともしなくなっていた。

「あれさ、今は仕事で身動きとれないから。今夜なら何とかなると思うよ。」

「まじ、ごめんね。何時くらいにいけばいい？」

「まだそいつは寝てるから電話通じないんだ、連絡とれたらコウちやんに電話する。」

「ごめん、ありがとね。」

電話を切り改めて部屋を見回し布団の上に大の字になった。ふと冷蔵庫に目をむけコンビにで浮かれて買い物をして来た馬鹿な若者を思い出していた。

何時間経っただろう、いつの間にか眠っていた。

こないだからの疲れを一気に回復させようと体がそう反応しているのか気がつけば寝てしまう。

怒りの感情は収まってはいないがこの状況に慣れてしまっている。彼女にうまく教育されてしまっていた。

詐欺師とペテン師

夕方六時を過ぎた頃だろうかファミレスの駐車場の隅で便箋ほどの封筒を持って何かを待っている男がいる。

細身の長身で一見すると顔は悪くはない。リーゼントっぽい髪からワックスの匂いがしている。

おばさんならころっと騙せそうな雰囲気醸し出している。というか、若い子は無理かもしれないというセンスだ。

少し風が冷たいので持って来ていた上着を着て内ポケットに封筒を直すと車のドリンクホルダーから飲みかけの缶コーヒーを取り出しタバコを吸い始めた。

缶コーヒーを飲みながら時計を見た。

「ったく、おせーなあーたまには時間通り来いっつうーの」

太刀川は独り言を吐いた。彼も気の弱いオトコで本人の前では絶対にこういう事は言わない。

太刀川は九州の田舎の出身で上京後は宝石関係の仕事をし一時は雇われでは有るが店長までつとめていた。

しかし、詐欺の様な方法で売り上げを上げていた事やセクハラをしていた事、店の金に手をつけていた事等々色々な問題が明るみに出て追われるハメになった。

彼はバツイチで前妻との間に二人の子供がいるのだが相手が絶対にあわせてくれない。太刀川は子供達には甘いと周りが言う程の子煩悩だったが離婚後は一切会っていない。

前妻と言うのもそもそも前の店で手を出した従業員で太刀川の口車に乗せられ散財したあげく妊娠して籍を入れたのだった。

タバコを吸い終え行き交う車を眺めていると前から白いセルシオが勢い良く入って来た。

「おう、わりーなあ。福田の兄貴と話し込んでやってよ。」

「ども、お疲れさまです。」太刀川は愛想笑いをしながら軽く会釈をした。

「お前、今週分持って来たか？利息こみで3万だぞ」

「はい、これです。」そう言うと太刀川は内ポケットから封筒を渡した。

太刀川は続けて言った。

「あの、田口さんさつき電話した件なんですがね……」

田口は太刀川を目で殺し封筒を開けた。

中に息をフツと吹いて中身の紙幣を取り出すと封筒を丸めてその場に捨てた。

「んで、なんだ？」

「次の客を見つけたって件なんですけどね。」

「んで？直接下ろさせてくれって話か？」

田口は太刀川の肩越しに自動販売機に目をやった。

「微糖でいいすよね？」

という太刀川は走って缶コーヒを買って缶を開けて田口に丁寧に渡した。

田口は43歳太刀川は41歳年齢的にはあまり変わらないのだが田口は暴力団員だ、

太刀川は反抗できないのだが内心は暴力団と言うのはヤツのはったりではないか？と思ってもいる。

組の名前や暴力団情報はよく話しているが自分の組の事や舎弟などは一度も見えた事がない。

羽振りが良さそうな話はよく出るがセルシオも2代前の型の中古車だ。

しかし、背中に刺青が有るのは一度見ていたのであながち嘘とも思えない。

「おい太刀川。」

そう言うと少し沈黙し目をつぶってポケットに片手を入れて言った。田口は背が160cm程度で太刀川から見ると背が低く少し小太り

の天然パーマだ。しかも何本か歯が抜けている。
格好付けようと大物ぶる田口を見ると笑いそうになる。しかし、田口はいつもこんな調子でカッコ付けたがる。

「お前今回は紹介料じゃ不満なのか？」

太刀川は毎回周りの友達に薬を勧めては田口の所で買わせるいわゆる「薬の営業」をして紹介料をもらっていた。

「いや、今回のヤツつてのが会社の同僚で仲もいいんですよ。」

「ほお、お前と仲がいいとはよっぽどやな。」

「それに給料が俺とそんなに変わらないからもしも迷惑かけたらヤバいなーと思つてですね。」

「おい、そんなことはこつちでやるから心配すんなよ。」

「それと、同僚だと金だし合つて引いたり（薬を買う事）できるかな？とも思つてですね。」

「なんだよ、それが目的かよ、つたく面倒くさい言い方しやがつてよ。」

「すいません。」太刀川は頭を軽く下げた。

「まあ、いいけどよ。金はお前が持つて来て交換だからな。」

「すいません、勝手言います。」

太刀川はこれでも元詐欺師だ、彼は今から客となる同僚の女が飲み屋で働いていると言う事を十分計算していた。

そしてその同僚は薬を使つて女を奪い返す計画である事も承知の上だ。

「おい、太刀川」田口はまたポケットに手を入れていた。

「はい」

「兄貴がお前にバイト紹介してやつてもいいつて言つてたぞ。」

またかよ……太刀川は思った。

太刀川は兄貴に会つた事がないのだが太刀川のいつものお世辞トークでビビっていると勘違いしているのだ。

それを利用して自分の仕事をさせたり、兄貴からの仕事をさせてピンハネするつもりだ。

「．．．本当にこのオツサンあたまわりーなあ。．．．．．太刀川はいつも思っていた。」

「いや、いつもすいません。でも仕事が県外とか入りますし早出とか有ると迷惑かけますんで。すいません。」

「また、それかよ。はつきりいってそんな仕事よりこっちの方が儲かるぜ。だいたいお前は肝が座ってないっていうか．．．．．」

田口の説教と武勇伝が始まった。多分、大抵の事は嘘だと思いがながら太刀川は時折「すごいですね」「まじっすか？」

などと言って田口の機嫌を損なわれない様になっていた。田口も一通り喋ると時計を見て

「おお、こんな時間か。やべーなあ。」

聞いて欲しそうなので太刀川は聞いてやった

「何か用事っすか？」

「いやあな、こないだから25のモデル出身の女がいるんだけどよ、そいつがしつこくてさ、しょうがないから約束しちまったんだよ。」

「へえーモデル出身とかってかわいくないですか？」

「顔か？そりゃいいよ。マイルも抜群そうだよ。」

「いいじゃないですか。うらやましいっすよ。」

「お前もまだガキやな、女なんかいっぱいいるじゃねーか。」

太刀川はこの天パーの歯抜けチビがよく言うわと思いつつながら

「いや、田口さんとは住む世界が違いますから。僕ら庶民には想像もつきませんよ。」

「何言っただ俺は昔からこんな感じだよ。さ・て・と．．．．んじゃ言ってくるかなああ〜」

「お疲れさまです。」

そう言うつとすぐに車に戻りダッシュボードから薬をだして確認した。太刀川は最初から少しではあるが自分で持っていたのだ。

しかし、これをヤツが本当に金を出して買つか試してからでない

頼めなかった。

もしヤツがいらぬなどと言うと、田口の説教を受けなければいけないし

何より自分の小遣い稼ぎがどうなるか見定めたかったのである。

しかし、はじめから持っていると言うと恩を売れない。

「コウちゃんの為に一肌脱いだよ」的なアクションをつけたかったのだ。

太刀川はすぐに電話をした。

すると寝起きの声で

「はい、井上です。」

と聞こえた。

「あの太刀川ですけどコウちゃん？」

コウちゃんは本名を井上 こうじと言う

年令は31歳だが会社では太刀川よりもかなり先輩で太刀川が童顔なのと敬語を使って来たので井上は同じ歳位だと勘違いをして、最初から太刀川にため口を使っていた。

「ああ、太刀川？社長かと思ったよ。」

「はあ？寝てた？」太刀川が少し呆れた声を出した

「ごめんごめん、いいよ。」

「例のヤツねまだ取りにはいつてないけど。友達に渡すからって頼んだら安くしといてやるってさ。」

「ああ、ありがとう。」井上は内心・・・やっぱ2回もくれる事は無いか・・・と落胆したのと同時に言われる金額に少し不安になった。

相場も分からないし違法な物である事は間違えないだろうし、その背後には犯罪組織がいてるのだ不安になって当然だ。

「えつとね0.5gで二万円だつて。」

そう言われても全く見当がつかない。0.5gってのが多いのか少ないのか。

「それって安いなの？」

「うん、安いよ。」

二万円か．．．無い事は無いが．．．もったいないな．．．
そんな雰囲気以太刀川は感じたのだろうか

「コウちゃん、よかつたらさあ半分づつだして折半しない？」

おお、それなら納得だ。井上は「了解」と返事をした。

さすがは太刀川だ、相手の不安を見透かしていた。

「それじゃ、俺すぐ動けるから薬取りに行つてから電話するんでそんなときコウちゃんの都合いい場所までいくね。」

「わかつた」

「んじゃ、あとで」

そう言つて太刀川は電話を切つた。

そのまま、車内で薬を半分に分けだした。

と言つても計りなどない、目分量だ。もともと0.5gも無かつたのだが太刀川はさらに自分の方を少し多めにして袋を直した。

「よし、オツケー」

今すぐ出てはまだ、早すぎるので自動販売機に缶コーヒーをかいに車外に出た。

さっきより風が強くなっていた。

興味

暗くなつた彼女の部屋で一人ボーっとしている男がいる。井上だ。太刀川との約束があるので下手に動く事も出来ないし、彼女は多分帰つてこないのとおりあえすくする事も無い。

部屋をあさつてオトコの手がかりを探そうかとも考えた。

とは言つても彼女は日記を書いている訳でもブログをやっている訳でもない。

部屋には漫画や雑誌が数冊とテレビやコンポなど変わった物も無い。保険証や通帳などの大事な物が仕舞つてある場所は知っているがそこは開けると一目瞭然で分かる。

それにどこか「今更・・・」というもある。

冷蔵庫の前に行き昼間買つて来た牛乳を飲みだしテレビを付けた。

韓流スターがゲストで出ていた。

「馬鹿らしい、韓国のスターが人気あると思つてんのはテレビ業界のやつだけじゃないか？」

といつてチャンネルを変えた

新政権について評論家が話をしていた。

「へえ、ホントお前ら無責任だよな、勝手な事言つて言いつぱなしで金もらえるんだから。」

またチャンネルを変えた。報道番組の特集が放送されていた。

刑務所の話で小指の無いオトコが顔にモザイクをかけられ受刑服の格好で後悔の念を話していた。

レポーターが聞いた「では、もう最後は借金ばかりが膨れて行つたのですね。」

受刑者が答えた

「シャブてのはホント骨までしゃぶるんだよ。だからシャブつて言うんだ。」

レポーター更に聞いた

「でも一般の私たちから見るとそんなにいいものなの？って、身を崩す程の借金をしてまで？って疑問に思うんですけど。」
井上は画面を凝視した。まさに今、自分の抱えてる不安の種をやっているからだ。

「そりゃさあ、普通の日常がつまらなくなるよ。だって信じられないくらいの自信と力、それに快感が溢れてる毎日を送っていたらそりゃ毎日がつまらなくなるよ。そのうち薬が無いときつくなくなってイライラしだすだろ？そしたらもうやめられないかもな。だからシヤブを買いにきてた客ってのは薬の為ならどんな事しても金作ってくるよ。」

井上はこないだの出来事を振り返りながら少し納得していた。自分が犯した罪は加害者も被害者も自分になってしまふのかも・・・などと考えながらテレビを見ていた。

「男は詐欺か窃盗、女は風俗これが成れの果てさ。」
井上はこれを聞いて「まさか、やっぱりテレビだな作り物の世界だ、にしてもこれは酷いな」と言って聞き流した。

それから番組はスタジオのコメントーターの話に変わり最近の薬物犯罪のグラフ出しているのと逮捕者の性別や年令を話した。グラフを見た井上は「へえ、以外に多いんだな。」と安心した。こないだまではこんなグラフには興味も無かったのだが自分が薬物をしてからは急に興味を持ち出した。

さらにテレビのアナウンサーは先日捕まった女優の話を持ち出し世間への影響力を語りだした。

「何を偉そうに、お前だって薬やったらどうせ変態になるんだろうが。でも逮捕されたあの女優もやってたんだな・・・相手の男を少しうらやましく思った。

牛乳を飲み終わると、ゴミ箱へ空箱を投げ込んだ。

太刀川まだかな？と思い電話をかけてみた。

「もしもし、太刀川？」

「コウちゃん、ちょうど電話しようとしてたんだ。」

本当かよ？とまだ少し太刀川への猜疑心は抜けきれていなかった。

「どうそっちは？俺はいつでも出れるけど」

「ああ、もう終わって俺も動けるよ。」

「今はどの辺にいる？」井上が訪ねると

「箱崎のちよい先だよ、コウちゃんどこ？」

井上は太刀川に彼女の家の場所を言いたくなかった。

「んじゃ、埠頭のところにコンビにあるでしょ？あそこは？」

「ああ、高速の下の所ね、オツケーおれは10分で行くよ。」

「俺は少しかかるけどちょっと待って急いで向かうから。」

「分かった、気をつけてね。」太刀川はいつも相手を思いやる様な言葉を残して電話を切る。

井上は急いで車に乗り込みアクセルを踏んだ。

「どうせ今日引いてもやる相手もないし今晚は帰ったら明日に備えて飯食って早く寝よ。」

そう考えて約束のコンビにへ急いだ。

太刀川のセダンが見えた。少し車高を落したホンダのレジエンドだ。向こうも井上に気付いたようで1回ライトを点滅させた。

隣に井上が車を止めた。窓越しに太刀川が「こっちに乗りなよ。」と言つので井上はエンジンを切り車を乗り換えた。

がチャッと扉を開け中に乗り込むと太刀川が一瞬凍り付いた様な目をした。

「コウちゃん、その顔・・・結構きてるね」

早速顔を言われた、内心少しムツとしたが

「やっぱり？やばいかな？」

「いやや、ヤバいつていうか何と言つか・・・」

さすがに太刀川もすぐには言葉が出てこなかったが

「でも、会社みんなは顔面から落ちて血だらけになってるって思ってるから大丈夫じゃない？」

井上は少しホツとして

「だよ、ってかどうしようもないし。」

そう言うと太刀川が顎でドリンクホルダーを指し

「コーヒー買ってるよ。」

いつも気が利く男だと感心しながら

「ありがとう。」と言って缶を開けた。

「コウちゃん例のあれだけだね、友達にね俺の友人だからって言うたらさ上等のやつ持って行ってやれって言われてさ。」

「えええ〜んじゃ高いの？」

「いや、そうじゃないよ。ってかおれがコウちゃんにそんな事言う訳無いじゃない。そうじゃなくてね知らないと思うけどこういうのってさ、買う所で質がバラバラなんだよ。中には全く効かない物もあるからね。それにくらべこの質はこの値段では手に入らないんだよ。」

「へえ〜そうなんだ。」

「うん、だから質と値段ともによくしてくれるからこいつの所で今度から引いてやってよ。」

そう言われても他にこんな知り合いもないし選択肢は無かったし直接引くなど毛頭思っていなかった。太刀川も十分それは分かっただけだがそうやって恩を売り他の売人を捜させない様にしておいたのだ。

「ちよつと待ってよ俺の事は言わないって言ってたよね。俺これからも直接はいやだよ。」

太刀川の狙い通りだった。太刀川はそれを確認したかったのだ。

「ああ、そうだね、コウちゃんからすると知らない人だしね。いいヤツなんだけど知らないってのは心配だもんな。わかった、いつでも俺に言っ来てな。」

「よかつた〜、それにどうせ俺には他に知り合いもないし頼むよ。」

「そうだね、他のヤツとか探すと結構ヤバい人間とかも出てくるし、

どうかしたらこれもんだからね。」

と言って井上の顔の前で手錠をかけられたポーズをした。

「君子危うきに近寄らずだね。」井上はそう答えた。

太刀川もうなずきながら話しだしバイザーから例の小さなビニール袋をとりだした。

「はい、コウちゃんパケ（ビニールの小さなパッケージ）の重さを除いて正味0.25g計ってもらったから。」

こんなもんか、少ないな〜と思いつながら財布から一万円取り出し太刀川に渡した。

太刀川は黙って金を受け取り胸のポケットへ入れた。

「モノがいいからね〜ここのは。俺ももう他の所では満足いかないもん。」

井上はふと思った。

「ねえ、太刀川はよく薬やるの?」

「いや〜もう最近はめつきりご無沙汰だね。でもたまーに連休とか...くらいかな?」

「へえ〜」そう答えると井上は缶コーヒーを飲んだ。

すると太刀川の顔が一瞬にして凍り付いた。

目の前をパトカーが通っていたのだ。

「コウちゃん、もし職質とかされても慌てちゃダメだよ。平常心だからね。」

井上は「お前の方こそ大丈夫?」と思わず返してしまった。

すると信号が変わったのかパトカーは走り出した。

太刀川が胸をなで下ろしたのが分かった。

自分もこれからはこういう緊張感を持たなければいけないのか...とその様子から感じていた。

太刀川はカツコ悪い所を見られたとでも思ったのか、なにか言い訳をしたそうだ。

「いや実はねここだけの話さあ」と途中まで言う

太刀川がタバコに火をつけようとした...この言い訳長くなりそ

うだな．．．と察し

「ごめん俺行くは、警察戻って来たらたまんねーし。んじゃ、ごめんね。ありがとう。」

と言って車を降り自分の車へと戻った。

太刀川が窓越しに「んじゃ、また明日」と言って先に発進した。

井上は太刀川が焦っていたのを思い出し少しにやけていた。

副業

太刀川は井上と別れた後車を走らせながら電話を入れた。

「ああ、もしもくし、はたぼう？」

「あ、あ太刀川？、どうだった？」

電話の相手は会社の営業をしている波多だった。

「あー引いて来たよ。ただな、無理言っただけ分けてもらって来たから
0・35か0・4

かそんくらいだった。んで2万5千だつて。」

「ああ、それでもいい。悪いね。んで今どこ？」

波多は少しでも早く欲しいようだった。こういう状態を通称”あおり”と言う

「あせんなつてすぐ行くから、今回は上等だから高いんだよね。

なんせ組長さんクラスが使ってるヤツだから」

「おお、そりや楽しみだね。今からそつち行くよ。今どの辺」

「じゃいつものパチ屋の所にしようか。」

「分かった。すぐ行く。」

太刀川はもともと0・5も無かった物を0・2g弱を0・25と言
つて1万円で井上へ残りの0・3弱を0・4と言つて波多へ2万5
千円で売った。

いくらで仕入れて来たのかは分からないが儲けが出ているのは間違
いないだろう。例えば一回1万円の利益でも量や回数が継続するのな
ら楽な商売だ。

太刀川は田口には適当に紹介して自分は管理しやすそうなヤツに絞
り顧客としているのだ。彼にはおいしい商売なのかもしれない。

国道を南下して約束のパチンコやへ向かっていた。すると携帯電話
がなった。

太刀川は表示を見ずに電話に出た

「あ、太刀川？後何分くらいかかりそう？」

相手は波多だった。さっきの電話からまだ10分程度しか経っていない。

しかし、”あおっている”のだ。とにかく早く薬が欲しいのだ。

「そう、あせんなつて。あと5分か10分だよ。」

「分かった、まってるね。」

波多は昔、太刀川にマリファナ通称”草”を勧められ、そこから薬物の世界にハマって行った。

草を吸っている頃はまだ平和だった。しかし、草を吸うならこつちだよとLSDを勧められ今はシャブの虜だ。

今では車も売り好きだった社会人野球も止めてシャブにハマっている。

太刀川の薬の営業は確実に顧客を育てていた。

パチンコ屋に着くと波多が走ってきて車に乗り込んできた。

「ごめん、はいこれ」と言つて2万5千円をわたした。」

「はい」と言つてパケを渡した。

「ねえ、それとさああれある？」波多はパケを見ながら言った。

「あれつて？キーのこと？」

キーとは注射器の略である。

「うん、そうそうもう針がだめになつててさ、研いで使つてるけど、厳しいんだ。」

注射器は何度か使つと針先の鋭さが無くなり皮膚を通過しにくくなるのだ。

「ああ、1本だけなら新品あるよ。最後の赤キャップだ。」

「オレンジじゃないの？赤キャップかよ！やったね。」

赤キャップとは昔のインスリン用の注射器で針のキャップが赤色の物を言う。

でも今は廃盤になりオレンジのキャップに変わっている。

刻んであるメモリの幅が違つたため昔から薬をしている連中は薬の量

を計る際に慣れてる赤キャップを好むのだ。

「赤キャップは2千円もらうよ。」

「ありがとう。」といって2千円を払った。

波多はシャブを覚えてからは他の薬には目もくれない。実際に波多の家には使いかけのチヨコと言われる大麻の樹脂が少し残っているのだ。

しかし、薬の王様と言われるシャブと比べるとチヨコではとてもではないが刺激が足りない。

草やチヨコとシャブでは効きだすと精神状態の向かう方向が違うので本来は別物と考えるのが良いかもしれないが何せシャブだ、その効き方はものすごい。

それを注射器で体内へ直接接種しているのだ波多が狂うのに時間はかからなかった。

注射器をもらうと波多は礼をいって急いで自分の原付に向かった。

その頃、井上は家で顔に軟膏を塗っていた。

薬も抜けだし、食事も睡眠も取り今は落ち着きを取り戻していた。

「明日仕事だからなあ。この顔を少しでも回復させとかないとみともないもんな。」

と洗面台の鏡の前でつぶやいていた。そして横にあったシャツを着て部屋を移動した

井上は更にも上から服を着て携帯電話を充電器から取りベッドの上に横になった。

つきあいだした頃からの彼女から送ってきたメールを見返していたのだ。

「この頃はいつも一緒にいたのにな．．．」

女と言うのは熱しやすく冷めやすい者だ。情熱的な女は冷めたら他の対照に熱を上げたがる、浮気する確率が高い。

モテるオトコはそれを冷めさせないコツが分かっているヤツも多い。女はいつも熱くいる自分が好きなのかもしれないからだ。

井上は持論を脳内で展開していた。

しかし、こうしている間にも彼女は他のオトコと一緒に風呂に入っているかもしれないのだ。

「はあー、むかつく・・・」

井上は今まで彼女から何度こんないやな気持ちにさせられたらどうか？

ゲームでも本でも対人関係でも嫌なくらい感情を揺らがせるものは人はハマる物だ。

実際に簡単なゲームよりむかつくゲームの方がハマり易かったり、第一印象の悪い人の方がいいヤツだったりする。

井上は彼女にボロボロになるまで感情を動かされているのだ、好きにならずにはいられないのが現状だ。

携帯の写メを見ながら良かった時の記憶だけを辿っている。

浮気をされている瞬間にこうやって自身の心のバランスを取るしかもはや道はないのだ。

最初の頃は一晩中探して回ったり、知人や周辺の人間から情報収集をしたり、ありとあらゆる事をやったが時間の無駄に終わった。

こんなときに思い出すのは彼女の笑顔だ。オトコとは哀れと言うか愛おしい生き物である。

井上は涙を浮かべながら彼女に「おやすみ。」とだけメールを送信して眠りについた。

「おはようございます。」

井上は事務所に入るといつもの様に挨拶をした。

最初は部長が朝礼の後は社長が顔の傷について心配して話しかけて来てくれた。

事務員のおばちゃんも心配してくれ同僚達も何人かは声をかけて来た。

その後、伝票をとり営業の波多といつもの様に現場の諸注意などを聞きに軽いミーティングを行っていた。

と言ってもどこの現場でも大して何かある訳ではないが決まりなのでいつも朝は必ず会話の時間が設けられているのだ。

波多は顔の事や昨日休んだ事を心配している様子は無かった。

「コウちゃん、ちゃんと寝た？」

と聞かれた。井上は全身が痛くて寝れなかったのかな？と心配してくれていると勘違いをして

「ああ、もう大丈夫だよ。」と答えた

「気をつけてね。いろいろ。」

「うん、ありがとね。」

明らかに波多との言葉の意と井上の受け取った言葉の意は違っていた。

答え合わせ

井上は波多が中毒者だということに全く気付いていない。事務所を出た井上はトラックで集配の仕事に出た。

井上はまだ経験が浅い為、世の中で薬をやっているのは世の中の握りの人間だと思っていた。しかし、波多は違っていた。

．．世の中の人間は知らないからこそ反対するが隙があればすぐに染まってしまうだろう。現に社会の人間の職種や性別や年齢に関係なく大勢の人間が薬物をやっているに違いない．．．
中毒者の妄想も入っているが当たっている部分もあるかもしれない。中毒者は薬が効いていないと猜疑心が強くなるので家にいても常に緊張感を持っている。これが社会に出ると妄想につながる。

最後にはすれ違う人を警察だと思い込んだり、誰かに付けられていると勘違いしたり、挙げ句の果てには電波が襲ってくるなどと言いだす者もいるくらいだ。

井上達の働いている運送会社は建設現場の資材を運搬する会社で、土木関係や建設関係の会社に波多などの営業が回る。そこで発注された建設資材や仮設資材を運送するのが井上や太刀川の仕事だ。

波多は事務所で伝票の整理と資材倉庫のチェックをして営業に出た。勿論、新規開拓も大事だが得意先への更なる発注やご機嫌伺いなども重要な仕事の一つである。

営業なので時間にはある程度の自由は利くので薬の切れ目などは帰宅し少し体を休める事もたまにある。

とくに、今は折からの不景気で営業先を回っても追加や新規が出る事は皆無に等しい。それどころか行けば値下げを交渉されるので動かず経費をかけない方がいい場合もあるのだ。

波多はこの日、太刀川から引いた薬の残りを注射器につめて筆箱に入れておいた。

井上と違い注射器で接種している波多は一回の使用量は少なくて済む。体内に直接入れると言うのはそれだけすごいのだ。

波多は薬をつめた注射器を持ち歩く事が多い。

以前、太刀川に「危ないぞ、職質されたらどうすんだ？」

と聞かれた時に「いや、持っている」と安心して余裕があるけど、無いと不安でそっちの方が挙動不審になっちゃうよ。」

と答え太刀川を困らせた。

波多は会社の営業車で土木会社に向かった。

そこは韓国人から帰化した社長が起こした会社で波多はよくそこで油をうつっていた。

「こんにちは平社長いらつしやいますか？」

ガラガラ〜とアルミのサッシを開けて中に入って行った。

すると従業員が少し奥で麻雀の後片付けをさせられていた。すると奥から

「おー、はたぼうか？こつちこいよ」と社長の威勢のいい声が聞こえる。

「お邪魔してます。」といって社長室にはいり扉を閉めた。

社長は口の周りに髭をはやし禿げかかった60才前後のオトコで右の小指が第一関節から先が無い。

「おお、うち来たつて何もないぞ。」

「いえ、今日は太刀川の野郎の事で．．．」

「おお〜詐欺師だか売人だかやってるあいつか。」

平は太刀川に面識は無いが波多から話は聞いている。

波多は初めは調子のいい事を言つて薬を勧めておいてだんだんいい加減な値段で買わせ、その度に態度が横柄になって来た太刀川が好きではなかった。

更に、波多は平からも何度か薬を都合してもらった事が合ったので

多少は本音を話せる仲では合った。

「昨日も薬を高買いさせられてですね、本当もう昨日はカチンときましたね。」

「おい、そんな事言つて結局引いたんだろ？どうせあおつてたんじゃないのか？」

と笑い出した。波多は下を向いてにやけて誤魔化した。

「マトリックスにでも通報したらどうだ？」

マトリックスとは厚生労働省 地方厚生局 麻薬取締部の事でこの手の事件のエキスパートがそろつた国の取り締まり機関である。

「いや、社長それでは俺の金や馬鹿にされて来たプライドや、言つと切りが無いですが納得できないんですよ。だから、何とか社長の知恵というか経験でヤツから金を引つ張れませんかね。」

「ふう〜難儀やなあ。小馬鹿にされるのはお前にも原因があるんじゃないが。それに、シャブなんてもんをだらだら遊ぶからやつて。」

「そうなんですけどね。」波多は言われて言葉が出ない。

「だいたい、お前なんか考えたんか？そんなくらの知恵もたんとこのご時世仕事も取れんくなるぞ。」

社長は話をすり替えようとした。

社長は韓国人だった頃は何かあれば国に帰ればいいと言つ発想と反日教育による考えで無茶苦茶な事もやっていたがもう、この地に腰を下ろし商売を始めているのだ。

しかも、単純に考えてもまともな話ではない。この話を金に変えるにはリスクが高すぎるし成功しても手に入る金が対した事ではないと分かっているからだ。

人独りを納得のいく金に、しかも手っ取り早く時間をかけずに行うのはとても大変で動かす人間もそれなりに必要なのだ。

それを波多は映画の見過ぎなのか昔の社長の性格のままだと思ひ。簡単に考へてる。

人の性根は簡単には変わらないがの今の平は環境がそれを許さない

のだ。

波多としては社長の悪い友人達にその権力で何とかして欲しいのだが、平からするととても下らない相談だ。

社長室に40半ばの色気のある事務員がお茶を持って来た。

「こんにちは。」女性事務員が微笑みかけお茶を出した。「すいませんいつも。」

と波多が言った。女性が部屋から出て行き残り香がする。

「おまえ、今あの女とキメセクして〜とおもつたろ？」

キメセクとは薬を決めてエッチをする事を言う。井上が彼女とやった事だ。

「そんな、おもってないっすよ。」

嘘だ、中毒者でキメセクを経験したヤツはほぼ全てのヤツが思う。

社長も昔は半島から薬を持ち込んで売っていたので金と薬が余っていた時代を経験しているので波多が考えている事は分かっていた。

「はたばう、もそろそろまともになったらどうだ？もう散々薬も遊んだろ？金のかかる遊びはやめにしろよ。」

何とも説得力がない。平は小さいが会社の社長ではあるが困っている風ではない。しかも、どう見ても現役のヤクザだ。

それに太刀川が機嫌を損ねて波多に分けてくれない時は気前よく出して来たこともあるのだ。

波多は、太刀川への復習の話がめんどくさいんだろーな、と感じた。何度か社長の所で分けてもらっていたが小分けされたものとはいえお金を払って分けてもらった事が無かった。

頻度が多くなり一度「調子にのんなよ。」と電話で怒られその後一度お金を払うから引かせてくれと頼んだが断られた。それから、平からもらえる事は無かった。

それならばと他の売人を社長に紹介してもらおうと切り出した事も合ったがそれも断られた。

雑談をしていると社長の携帯電話がなった。

「ちよいとごめんよ。」

机の向こうで社長が何やら話している。どうも飲み屋の女の話をしている。

しかし、その会話の所々でその友達に何かを頼まれてしびしび返事をする様子もつかえる。

「．．．．．グラム3万．．．．．」

会話の中にその言葉を見つけた。

シヤブの話をしている。しかもおれが昨日太刀川からかった値段より格安だ。

電話を終え社長がソファーに戻って来た。

「あの、社長。今相場はグラム3万ですか？」

「ああ、聞こえてた。あれは俺の連れで相場はっ手聞くらさ。そんだけの話で俺がどうのって話じゃねーぞ。」

「いやいや、それはごもつともです、ただ相場が知りたくて。」

「そうねグラムでそんなもんじゃねーか？」

また騙されていた。太刀川は波多を自分の財布としか思っていなかった。

秋の空

女の名前はみかと言う。

27才でスタイルは悪くない。顔は悪い方では無いがとびきりの美人と言う程でもなく黒髪のストレートで背中の中頃まで伸びていてどことなく常磐貴子に似ていた。

店では人気もありそこで井上とも知り合った。

井上を会社に送った日夕方から京子と買い物約束をしていたので朝一番に確認の意味も込めてメールをした。

まだ、薬の余韻が残っている。寝れる訳も無くテレビをつけまた掃除を始めた。

しかし、途中で少し寝た方がいいかもしれないと思い掃除を止めた。少し汗ばんできたのでお風呂の準備をして京子からの返事がきていないかメールを確認した。

京子からはメールは来ていなかったが井上からメールが来ていた。珍しく絵文字が多用されていたので少し笑った。

ミカも絵文字を使ってハートマークを入れ返信した。お風呂に入りますこし落ち着いた。

お風呂から上がり少し片付けて寝ようかとパジャマを着て横になった。

1時間もしただろうか寝れずにテーブルの方に目をやると周りには井上と使ったアルミ箔やストローが綺麗に並べておかれていた。

全部使い切ってしまったのか、少し気になった。

使い切ってしまったのだろうと分かってはいたのだが気にすると更に寝れそうも無かった。

薬が効いている時などは特に気になった事が頭から離れなくなる。

ストローを取り見ると内側には気化してストローを通過する際の薬物が粉になって沢山付着していた。

それを耳かきを使い削りだしてアルミ箔の上にまた貯めだした。

それを昨日と同じ要領であぶりまた、吸い出した。ストローは2人分どちらも同じ様に粉を耳かきで集めると意外な量になった。

更にパケの中にごく少量ではあるがくつついている物も耳かきで集めた。

薬が効いている時は兎に角細かい事に気がつく。

女はそうやってしばらく一人で薬を楽しんでいた。

携帯が光った。先ほどだしたメールが返って来たのに気がついた。

京子は彼氏と何やらもめ事があり昨夜喧嘩をしているのもしかしたら行けないと言う内容を返して来ていた。

内容だけ読むと返信せずにまたあぶり出した。それからまたしばらくすると今度は浮気相手の男から電話がかかって来た。

女は深呼吸をして電話に出た。

「もしもし？おはよう。はいね。」

「おはよう、起きてた？」

オトコは相変わらずテンションが高い

「うん、どうしたの？珍しいね。」

オトコは何かを飲んで話した。

「いや、今日さそっちの方に行くからその後店まで送ろうか？」

「何時頃来るの？」女はストローをまだくわえたままである。

「多分ね．．．12時には終わると思う。店までは少し早いかな？」

京子も予定が分からない雰囲気だしミカはまだ、薬の効き目が続いているのでオトコと会いたかった。

「いや、それでもいいよ。電話くれたらすぐ出れる様にしておくね。」

「本当？んじゃその後ご飯でも食べる？」

それは勘弁して欲しいと思い「いや、ちょっと最近食べ過ぎてるからいいや。」

と断った。その後2〜3分話をした後電話を切った。

すぐに京子に買物物は止めておこうとメールを出した。

すると京子は自分の喧嘩のせいだと思ひ謝りのメールを返して来た。ミカはまた、一人でダラダラと薬を吸い出した。

どれくらい経っただろうか喉が乾いている事にすら気がついていなかった。

飲み物を取りに冷蔵庫へ行つてその場で水を飲んだ。

すると携帯にメールが来たので見るとオトコが用事が済んだのでどこへ行けばいいのかと聞いて来ていた。

オトコは家の近所までは知っているが家の場所は知らなかった。

ミカは浮気相手は所詮その程度だと考えたのか正確な場所は教えておらずいつも近所で降ろしてもらっていた。

すぐに返信して急いでテーブルの上の物を片付け準備を始めた。

約束の場所は歩いて5分程度のコンビニだ。そとは秋晴れで眩しかった。

既にオトコは着いていた。オトコの車もセルシオで田口と同じ型の物だ。

車に乗り込むとオトコが機嫌良さそうに声をかけて来た。

この男はいつもこんな風だ。

そしておざなりの会話をして車を出した。

「ね、ミカちゃん一回ね家に戻っていい？」と言って後ろを指差した。

少し大きな段ボールが2つ載っていた。

「人の預かりもんでさ〜精密機器が入ってるから車に乗せておきたくないんだよね。」

「へえー別にいいよ。」

このオトコは家に連れて返ると必ずと言っていい程ミカの体で遊びたがるのを分かって返事をした。

オトコは家に着くと段ボールを抱えてリビングの隅に置いた。ミカも上着をリビングのハンガーに架けるとソファーに座った。

「ああ、重かったなあ。軽い運動だよあれじゃ。」とオトコが言うのでミカは冷蔵庫からウーロン茶を出してオトコに渡して横に座った。

するとオトコは一気に飲み干しミカの横顔を見つめていた。

ミカは気付いていたがあえてそちらを見なかった。

肩に手を回して来た。左手を型に右手をミカの黒いスカートの中に入れて足と足の間を中指でゆっくり触りだした。

とても肌触りがいい。ミカはオトコに耳をゆっくり舐められて目をつぶった。

そのままオトコはキスをして舌を入れて来たのでミカも舌を絡ませた。

ミカはさつきお風呂に入ったばかりで肌もスベスベでシャンプーの匂いが残っている。

オトコはその匂いがまた、たまらなかった。右手を今度はそのまま黒いセータの中に下から入れて胸をもみながらセータを上げた。

赤いブラが見えそれをずらして舐めだした……

ソファーの上に体をゆっくりと倒されオトコはミカの足を広げスカートの中に顔を入れた。

薬のせいでミカは既にかかなり感じており下着の上からでもすぐ分かるくらいに濡れていた。

しばらくオトコがミカの体を舐め回しながら裸にされて行きミカはオトコの前で自分だけ全裸にされた。

オトコはミカの前に立ちミカに自分のズボンとトランクスを降ろさせる。ミカの頭に手を回し自分のあそこへ持って行った。

ミカも答える様に先を下で軽く舐めると口に含んでゆっくり頭を動かした。元来、ミカはエッチが好きな方でくわえるのも好きだ

った。

井上も体の相性がいいと言っていた様にミカは上手だった。

オトコはくわえさせたままソファーに座りミカもくわえたまま、あわせる様に腰を落とした。

オトコはミカの胸を上からもみながらミカの腕を引っ張った。

すると、ミカはオトコと向かい合う様にオトコの上に座り自分から入れ腰をゆっくり振り出した。

オトコはミカの揺れる胸と感じている顔を見ている。ミカもオトコがいやらしい顔で見ているのを感じていた。

「ほら、もう少し激しく腰ふってごらん。」オトコはミカの口に指を入れながら言った。

ミカは言われた通りにした。

周りにシャンプーの匂いをまき散らす様に黒い髪を揺らしながら声をあげていた……

井上はその頃トラックの中で時間を忘れ一人で自慰をしていた。

方向性

井上は一日の集配を終え少しまだ、時間があつた。

このまま事務所に帰っても倉庫整理をさせられるので時間が余つた時はお決まりの公園の横で少し時間をつぶす。

トラックを止め携帯電話で薬の検索をかけた。

「覚醒剤」と入力した
すると、出るわ出るわ．．．こんなに覚醒剤でヒットするとは思わなかつた。

しかし、どのサイトも警告サイトや違法性を説明したサイトで井上の知りたい情報ではなかつた。

井上が知りたいのは効いた状態の事や相場、入手先などのいわゆる生きた情報なのだ。

掲示板を覗いてみたが信憑性に欠けるので適当に流した。
しばらく探しては見た物のお目当ての物はなかなか出てこない。

「こういつのやつてる奴らはどこで情報交換とかしてるんだろ？」
と考えながら携帯を触っていた。

覚醒剤の他にも大麻やLSDやMDMAなど改めて薬物の種類の多さに少し感心していた。

「こんなに多いんじゃない？ やつてんじゃない？」

と思いつながらコカインやヘロインと言つたよく映画などで耳にする薬が少ない事に気がついた。

ヘロインは130年程前にロンドンで開発されドイツの会社が咳止めとして販売された薬で日本でも30年程前は覚醒剤と並んで闇市場ではよく販売されていた。

チャイナホワイトなどの強力な薬はヘロインの改良型だ。しかし、ヘロインは覚醒剤に比べて効いている時間が極端に短いため接種す

る回数頻度が多くなる。

また抜ける時に訪れる身体中の関節に走る激痛や少し風に撫でられただけで素肌走る激痛や、その痛みるを押さえる為の改作と絶頂期の快感を求める欲求とが重なり依存傾向が強くなりやすい。そもそも効いたときの効果が違う。

コカインはコカ・コーラで有名な薬物で昔コカインを入れて販売していた程お手軽に手に入る薬物だった。クラックと呼ばれる物はコカインの改良版で強烈にハイにしてくれる代物で南アメリカ原産の物が多い。

覚醒剤よりも強烈だがこちらにも効いてる時間が短い。

井上は闇社会で流通する薬の話をしていろいろ調べだし日本では大麻が一番流行している事に気がついた。

しかし、やはり頭には効いてやるキメセクが優先されどうも大麻は違う様な気がして来た。

とはいえ十分すぎる程の興味はわいた。

「さてボチボチ帰るかな。」

帰りに給油にスタンドにより軽油を満タンにして事務所へ帰った。

事務所に行く途中で太刀川と波多が休憩室で話しているのが見えた。

井上は事務所で伝票整理をしてタイムカードを押し事務所を出た。

帰りに休憩室に目をやるとまだ2人が居た。

井上も中に入りコーラを買おうと自動販売機に近寄ると2人の会話が耳に届く。

小声で太刀川が言う。「……んじゃ、そこから引けよ。別に前が頼むから、やってやってるだけ文句言われる筋合いは……」
全部は聞こえなかったがこんな会話をしていた。

波多が言い返す。「……いや、そんなね太刀川が悪いとかそんな事言っただけじゃなくてさ。」

と言った時にこちらを振り返った。

「よーおつかれさん。」波多が手を挙げた。
続けて太刀川が「戻ってたのかよ。こっちなよ」

井上は「つかれた」といいながら2人の方へ寄って行った。

太刀川は2人をみて自分の近い将来の子分達としか思っていないかった。

「んじゃ俺部長んと言ってくるから。」と波多が席を立った。

「うん。んじゃね」井上が言うと波多は出て行った。

すると太刀川が話しかけて来た。

「あれ、まだ使っていない？」

「うん、まだそのままにしてる。なんで？」

「いや、あれじゃなくて草とかさ、たまに知り合いが持つてくんだよ。いらなんて言うんだけどね、もしコウちゃんが欲しい時は言うてね。」

「あ、ああ、でもそんなにハマってる訳でもないしさ。」井上はただ自分はハマらないと自信が有るようだ。

しかし、太刀川は井上が女と再会して薬を使うであろう土曜日を心待ちにしていた。

井上は太刀川との話もそこに切り上げ帰宅した。

井上は帰りにコンビニで弁当を買い部屋へ上がった。

2DKの部屋を借りているのだがなかなか気に入っている。

携帯を充電器に置き冷蔵庫からお茶を取り出し隣の部屋へ行った。

パソコンの机に向かいiTUNEを起動し音楽をかけながら弁当を食べていた。

彼女にメールを出してからわざと携帯をチェックしない様にしてた。

こうすることで彼女との別れを決心しようとしているのだ。

しかし、そう言う事で彼女を逆に意識していると言う事を気付いていない。

別れる時と言うのはそんな苦勞をしてまで意識を遠ざけたりせず以

外と向き合ってピークを過ぎると一気に冷めるものかもしれない。弁当を食べ終えお茶を飲むともう一度冷蔵庫へ。

コーラを取り出しパソコンの前に座り音楽を止めてスカイプを起動した。

スカイプとはネット回線で話したり映像や音楽を送り合うコミュニケーションソフトだ。

オンラインゲームで知り合い面識もある友達と話して気を紛らわそうと考えたのだ

．．．しかし、近所に住んでいる面識のある友達．．．というかスカイプ仲間はまだスカイプには来ていなかった。

改めて一人となると寂しさが胸を突く。そこでP S 3を起動しメタルギアオンラインと言うゲームを始めた。

本当は誰かと話したいのだが出て行く程の前向きさは帰宅と同時に無くなっており、誰もいない一人の家にただ孤独を感じていた。

彼女との関係が良好な時には思いもしなかった寂しさを今は虚しさとし痛感している。

仕方なく好きなゲームにでも熱中してとにかく彼女から意識をそらしたかったのだ。

ゲームをやっても全く集中できず同じクラン（チーム）の人からの

チャットも返していない。

そのうち集中力も無くなり気がつけば彼女の事を考えていた。

するとやはり彼女を奪い返したいと言う願望が出て来た。

そう考えると太刀川から買った薬が気になった。

机に向かい椅子に座ると引き出しからパケを取り出し中身を見た。

「こんなに少なくは大丈夫かな。」

と小指を入れてさきつちよに少しだけ粉を入れた。

「うわ．．．苦い。」

初めてした時は不安と緊張から丁寧に取り扱っていたのだがサイトで調べたり経験をしてしまうと井上も油断が出たようだ。

「こんなに苦いとコーヒーにあうなあ、太刀川もこれ入れたらいいのに。」

とくだん事を思いつつ隣のパソコンでまた薬のことを検索した。

すると「ドラッグ」で検索すると「ドラッグアイテム」という項目が目がいった。

クリックをしてそのサイトへ行くと水パイプやら粉碎器やらピアスやらいろんなグッズが置いてある中にガラスのパイプを見つけた。

「ガラパイ」と言う商品であぶりの必須アイテムと書かれていた。

こんな大胆な事を書いておいて横にお約束の「観賞・装飾用」と書いてあった。

どこの世界にこんなドラえもんの手みたいな形のガラスパイプを見て喜ぶヤツがいるのか知りたい物だ。

井上は更にガラパイの使い方を検索した。

何とこれは中に薬の粉を入れて下からライターであぶると煙溜まりで煙がくるくると渦を起こして回転し一気に吸引できると言う代物だ。

井上はこれはいいと思ったが通信販売で買うと住所などを通知しないと行けないので抵抗があった。

次にこの商品を地元で取り扱っていそうな店を探した。

すると車で20分程の所に「フェミニナイズ」という店を見つけた。

明日の集荷ルートにこの店の近くを通るので場所をメモしておいた。

ボケ

翌日の仕事の合間に時間を作り昨日見たサイトを探した。

井上は薬と言う物は注射器で使用する物だと思っていたので今回発見した炙る為の道具などには驚きも少しあった

サブカル的な物に全く興味をささなかつたのでなおさらである。

繁華街の外れに通称『親不孝通り』と言う所がある。

夜になればビルの陰や地下、マンションの一室で若い連中が集まりたむろしている通りだ。

勿論クラブや風俗店、居酒屋なども軒を連ねているが昔程の賑わいはもう見られない。

「フェミニナイズ」という店を見つけた。

「いらつしゃーい」中にはヨッシーという名札を付けた店員が一人立っていた。

ヨッシーは言う「気になるもんがあつたら言つて下さい。」
とても愛想がよくにやけている。

ガラスケースの中には水パイプやボディーピアスなどが多数飾ってあり正直、こんなもの販売していいとは思ってもしていなかった。

ヨッシーが狭いカウンターからこちらへ来た。

「水パイプですか？紙ですか？それとも・・・。」

それとも・・・というのに井上は引つかかった。

やはりこんな連中でもシャブは危険だと思つていのだろうか？

井上は「ガラスのパイプを探しています」と告げるとヨッシーが「その熱いのと薄いのがあります」と指を指した。

見ると大きさや形も様々ある。・・・正直、どれでも良かった

「何が違うの？」

この質問でヨッシーは井上をなめてかかったのか急に調子に乗り出した。

「ああ、これね、薄いと解けるのが早いけど割れ易いし厚いと割れにくいけど焦げ易いんだ。俺なら薄いのを勧めしてるね。」

「ああ、そう。」

ヨッシーは調子に乗って言う。

「最近グラムいくらなの？俺最近あっちの方行ってなくてさ、最近はどうなのかな？って思ってたさ。」

ヨッシー・・・なんともふざけた男だ。

「おい、なにが聞きたいんだ？」

.....

少しヨッシーがビビったのか「ああ、いや、お客さんとはフレンドリーにと思ってさ.....」

ヨッシーは黙ってレジへ向かった。背中からいじけているのが分かる。

井上は「おい」とヨッシーを呼んで手前にあるその厚いパイプを買った。

支払のときヨッシーがまた喋りかけて来た。

「ねえ、薬に使うなら掃除用のこれいらんかい？」

手に持っているのは綿棒の先がタワシのようになってる棒だ。

「これ、サービスで付けといてやるよ。」

僕は、何故か「結構です」と断った。

するとヨッシーが「俺さ、この店でバイトが長いんだけどさ、草とかなら口聞いてやれるから、いる時は頼ってきなよ。」

多分これは嘘だ調子にのっているだけだ。

井上は彼を無視して店を出た。

紙袋にガラスのパイプを入れてトラックに戻った・・・それだけな

のに何か非常に悪い物を持ち歩いている様な気がした。残りの集配をしている時も何故か周りを警戒してしまう。会社に着いてもいつもより口数が少ない。こんな時は特に太刀川だけには会いたくない。井上はサツサと事務処理をし家路に着いた。

家に着くと弁当も買わずに部屋に入り机に座った。

引き出しからパケを取り出し横に今日、買って来たガラスのパイプを出した。

パケから半分程に切ったストローを使い粉を出しパイプの口から中へ入れた。

下からライターで炙るとパイプの下の方の丸い部分の中で気化した白い煙が渦を作って回転している。

見ているだけで面白くなつて来たがパイプのそこが少し焦げだしたので急いで吸い上げた。

吸い込み息を止めて目をつぶった。

ハツとして一気に息を吐いた。

軽い目眩がして・・・どうもならなかった。

パイプでの吸引に期待をしていたので少し残念だった。

パイプの中には解けて一体化した白い個体が見えたので更に炙った。同じ動作を繰り返すが効いて来たと言う実感が無い。

30分程すると喉が渴いて来たので冷蔵庫へ行こうと椅子から立ち上がった。

何と、立ち上がった瞬間に全身に鳥肌が立った。

深呼吸をするとまた、鳥肌が立った。

電器に目をやると何となくいつもより眩しい。

首の周りが何となくムズムズする。

効いていたのだ。

とりあえず冷蔵庫から水を出し飲んだ。

体の中を冷水が通り抜けて行くのが分かる。

ベッドに座りボーっとしていたがそれはそれで気持ちがいい。

ベッドに座りみんなの事を考えていた。

太刀川や波多等々．．．

以外といいヤツの様な気がして来た、太刀川は詐欺師の様なうさしくさい所はあるが彼女との中を何とかしようと考えてくれたし

波多は心配してくれるから俺をうるさく言っんじゃないか？．．．

などとても周りの人がいい人ばかりに思えて来た。

完全に薬が効いている証拠だ。

井上は食欲や睡眠はもういらぬ体になり今はただ多幸感の始まりに微笑んでいた。

時間と感覚

井上は薬が効いている。

とても、周りの人がいい人ばかりだと思つと気分が良くなつて行つた。

秋も深まりだそうとしているのに何故か汗が出ている。

少し、熱くなつて来たので上着を脱いだ。

これも薬の症状だ。

前回、顔中を血だらけにした時と共通する事だが痛みや寒さには鈍感になるのだ。

その分何故か快感にはとても敏感になる。

井上はミカの事を思い出しこないだのセックスの事を思い出した。すると・・・不思議なくらい足と足の間全体がムズムズしだした。

これだけでもすごく気持ちがいい・・・と言うよりもこの感覚が更に井上の想像をかき立てようとする。

井上はミカが他の男とやっているのを想像した。

もはや井上のエロ妄想は止まらない。

そのままパソコンでエロサイトを見つけ延々と見始めた。

ズボンを下ろし自分で始めようとしたが何と！全然立っていない・・・

立つどころか見た事無い程小さくなっている。まるでどんぐりだ。

前回も経験した事だが何度みてもびっくりするサイズだ。

しかし、エロの想像は止まらない。

自分で触りだして3〜4時間、今度はいつも以上の大きさになって来た。

「はあ〜・・・こんなに大きくなるんだ。」これにも少しびっくりした。

結局、そのまま8時間以上かかって射精した。とんでもない量が出た感覚だった。

体がダラ〜ツとなったが眠気は全くない。

とりあえず大量の汗を落とす為に風呂へ入った。

今度は風呂の感覚が実に気持ちがいい。

ただ、裸になったと言うだけで全身が空気の流れを感じ取って脳に微妙な快楽を伝えてくる。

風呂につかると全身から疲れが溶け出す様な気分になんてさせてくれる。

井上は湯船につかりただこの感触を堪能していた……………

気がつくくと出勤の時間だ。

楽しい時間は光陰のごとく過ぎ準備を始めた。

慌てて用意を始めようとすると何故か自分の感覚以上に自分が大騒ぎをしている様に感じた。

この感覚のズレに更に焦りを感じた。

「今日一日は冷静に行こう。」

井上はそう考えた。

一瞬、ミカの携帯に電話を入れようかとも思ったがこの状況で喧嘩になるとアドレナリンが耳から吹き出してきそうなので考える事すら止めた。

井上は出勤前に軽く机の上を片付けた。

すると少し落ちていた粉が気になりだした。

綺麗に掃除をしておこうと思いがムテープで粉を引っ付けだした。

すると粉以外の埃も気になりだした。

机の上と周りだけでも綺麗にしておこうと考え回りをぺたぺたした

した。

すると今度は引き出しの中に入っていないかきにかかり開けてみた。すると文具だけ入れている引き出しにプラスチックライバーなどの工具が入っている事が気になりだした。

他の引き出しを開けて整理をしようと思いつき次から次に引き出しを開けて行った。引き出しには消しゴムのかすが溜まっている物もあり余計に気になりだした。

とりあえず引き出しの中を全部出してぞうきんで吹き出した。そうやって行くうちに机の上の本や電気スタンドやパソコンの埃も吹き出した。

気にしだすと目に見える物が全て気になりだした。普通ではノイロ―ゼになりそうなほどの思考だ。

それを一つ一つ丁寧に解決を始めた。

出勤の準備など上の空でまだ服も着ていない。

しばらくすると携帯が鳴った！

我に返り時計を見ると9時を過ぎている。会社からの電話だ。

「おい、寝坊か？」波多が少し不機嫌な声で一声を切った。

井上は言い訳を始めたが長々と要点を着かない話になっていった。

時折、井上は言葉が詰まったりロレツが回っていなかったりとても怪しい受け答えをし遅れて出勤する事になった。

波多はこのとき既に井上の事を見抜いていた。

波多は太刀川にはめられ薬物の世界に足を踏み入れてしまっている。井上の様な人間に対しては非常に敏感である。

故にお客や友達にもそつち方面の人間がいると独特の臭覚で近寄って行く術をも身につけている。

波多は井上に電話をした後彼の出社を待つ事無く取引先へ出かけようと営業車で会社を後にした。

会社の駐車場から200メートル程の所に銀色のセダンが止まって

いた。

波多はここ数日この銀色のセダンがやけに気になっていた。

偶然とは言え自宅の近所や会社の近くでよく見かけるのだ。

一般的に良く売れている車なのは分かっているがそれでも、同じ色の同じ車種を見かけすぎると思っていた。

薬のせいで一度気になりだした物は徹底して気になってしまつもの
だと思ひ少し薬や太刀川との付き合いを真剣に見直さなければ自分
が持たないと考えだしていた。

波多は会社の車で後輩達の所へ向かった。

先日、太刀川から仕入れた大麻を裁きに行ったのだ。

波多は太刀川の背後にいるらしい超大物ヤクザの親分から卸しても
らつた大麻10gを3万円のツケで仕入れ4万5千円で買ってもら
う為だ。

4万5千円の五千円とは太刀川への金利なのだそうだ。

そして利益の一万円は薬を買う為の資金だ。

波多は兎に角小銭を少しでも稼いで薬が欲しいのだ。

悟りの練習

波多は後輩の家に約束の時間より少し早めに着いた。

ピンポン

チャイムを鳴らすと中から波多よりも大柄な男が扉を開け中へ入れた。

「早かったっすね。」

後輩の名前は安倍といいヨッシーと呼ばれている。

雑貨店の店員をしていて波多が昔ガラスのパイプを買いに通った店の店員だ。

先日井上が寄った店の店員である。

とても愛想がよく波多でもすぐに仲良くなれた。

「おはよう、それより金ある？」

波多はすぐに本題に切り出した。

ヨッシーは自称クラブの人気DJだそうだが彼がクラブでまわしている所を見た物はいない。

しかも、友達が少ないと波多は思っている。

「波多さん4万しか無くてですな・・・。」

「おいおい、これは知り合いの親分に頼み込んで持って来たもんだぞ。お前、殺されるよ。」

親分がそんな金で殺すはずは無いのだがヨッシーは焦った。

「ちょっと時間もらえませんか？」

「はあ？どれくらいだ？」波多は少し怒った口調で聞いた。

「いや、すぐ連絡してみても金、用意しますんで。」

「おい、大丈夫かよ？俺もこれ引いた所には変な事できないんだからな。」

「ちよっと上がってってくださいよ。」

波多は黙って上がった。

ヨッシーの家は1LDKの賃貸住宅で女を騙しては家賃を払ってもらっていた。

女を口説く時に実家は金持ちだとか、車の免許もないのに車はベンツに乗っていた、昔は六本木でコックをやっていた。

嘘を付いては女連れ込むので大体の女は熱が冷めると出て行った。驚くのは彼はそんな女を脅したり嫌がらせをしたりしてたかっている。

部屋に上がるとヒモ生活を送る男だけ合って女が嫌がる様な汚い部屋ではない。

小ぎれいに整頓し、おしゃれな演出を心がけていた。

ソファアに座るとヨッシーはコップにオレンジジュースを注いで出して来た。

「ちょっと待ってて下さいね。」

というヨッシーは奥の部屋で女に電話をかけていた。

どうやら昔の女を脅しているようだ。

全く最低の男だ。免許は原付しか無く乗るのはいつも助手席で

ヨッシーは友達の水でも平気で手を出す様な男なので周りから追い込まれ一時逃げていた事もある。

10分程待っただろうか、ヨッシーが戻って来た。

波多がタバコを消しヨッシーの方を見るとニヤケながら言った。

「5千円用意できました。少し待って下さい、多分30分以内に持って来ますんで。」

「わかった、どうせ最近は暇だし茶でも飲んで待つとくか。」

するとヨッシーは愛想笑いをしながら波多のご機嫌伺いを始めた。

田口の下の太刀川の下波多のご機嫌を伺っているのである。

何とも滑稽な様子ではあるが違法の世界とはある意味では簡易的な縦社会なのである。

しかも、それを構成しているの実力でもなく経験でもなくただの虚勢である。

勿論、そうでない場合もあるであろうがその場合は車や所持品や噂や事件等々、本人が口にせずとも分かるものである。

波多がソファーに座って煙草を吸っているとその横でヨッシーが嘘を並べ立て昔の事を語っている。

「お前さあ、少し煩いよ。」

「すいません。」この時もヨッシーは笑顔である。

するとヨッシーの電話が鳴り、頭を下げて部屋を出て行った。

女が金を持って来たようだ。波多は鞆から大麻を取り出し、机の上に出しておいた。

ヨッシーが戻るとすぐに「すいません、これ」

と言ってお金を出した。波多は確認すると財布にいれ黙って部屋を出て行った。

ヨッシーはすぐに玄関の鍵をかけソファーに戻り袋を開けた。

鼻を袋に入れにおいを嗅いだ。

野草の青臭さが辺りに立ちこめヨッシーはにやけた。

テレビの横から大きな水パイプを取り出し中に水を入れ受け皿の部分に草を入れライターで火をつけながら一気に吸い込んだ。

「ぶへえ！！！！！！」

水の量が多すぎて水を飲み込んだのだ。

水パイプは直接大麻を紙に巻いてタバコのように吸うと喉が焼けて痛くなるのを防ぐ為に一度水で煙を冷やす役目をしている。

台所に戻り少し水の量を減らした。

再度ソファーに座り吸引を始めた。

煙を思いっきり吸い込むと息を止め目をつぶった。井上が薬を気化

させて吸った時と同じ要領だ。

一気に鼻から白い煙を吐き出した。

「ぷはあ〜」

するとヨツシーは一息入れてまた同じ事を2〜3回繰り返した。

ヨツシーは空腹状態だったのですぐ効くだろうと思った。

大麻の成分は一度体内の脂肪分に吸収されてから体内に回るので薬物の様に即効性はない。

しかし、空腹だった為か10分程でとても気持ちが悪く鳴って来た。日頃は気にもしないのに呼吸をする時の肺の動きや空気の流れ、力が抜けているはずの肩の力が更に抜けて行く。

足の力も全く入っていない。こうなると日頃どれだけ自然に力が入っているのかが分かる。

「まったく、日本は肩がこるぜ。」

この男よく言うもんである。

とても気分がいい。音楽をかけた。昔流行ったSnoop Dogの曲をかけた。

Snoop Dogは人気ラッパーで昔、アメリカ西海岸vs東海岸のレコード会社やギャングの激しい抗争の時に殺人容疑をかけられた黒人ラッパーで今でも当時のレコード会社の社長には裏切り者として狙われている人気アーティストだ。

相手の東海岸のレコード会社は当時は戦争に巻き込まれるのが怖くて表に出てこれなかったパフ・ダディーで、こちらも今では洋服のブランドなどを立ち上げ音楽やファッションの世界で成功した人物だ。

ヨツシーは自分が意気地がない為かこの様なギャングスタイルに今でもあこがれている。

その為だろうか、人には今でも人気DJだったと嘘を付く事が多い。

Snoop Dogの曲がとても気持ちよい。

実際に曲が体を触るのだ。聞こえてくる音が空気を伝わり耳に入っ

た瞬間から形になる。

そしてそれは体を触りはじめて行くのだ。まるですごく柔らかいプリンがゆっくり体に当たってはじめて行く様な世界に浸っていた。更に目をつぶると聞こえる音が脳みその中で歌詞がイメージした形になり頭の中で暴れ回っている。

想像するだけでおかしい。

「ふふううう、．．．がはあゝ！！！」

ヨッシーは腹を抱えて笑いだした。腹筋がねじれる程笑っている。笑いを止めようとしても次から次に笑いの波が体の奥からわいてくる。

するとまた一服した。

今度は窓から指した日差し的美しさに感激していた。

ヨッシーは寛大な心になり平和に感謝をし涙を流していた。

旗を降る踊り

波多はヨッシーからの利益でシャブを買うつもりだ。勿論、気持ちはずごく”煽っている”

営業中だったので会社の車に乗り少し冷静になろうと深呼吸をした。そしてゆっくり車を走らせた・・・

その後、逸る気持ちを押させて会社に帰ると太刀川が先に休憩室でコーヒーを飲んでいるのが見えた。

波多も事務処理を終わらせ休憩室に入った。

「おう、ハタぼう。お疲れ」太刀川が言った。

波多は前置きなく「今日ある？」

すると太刀川が言った・・・

「井上に貰えば？」

何を言い出すんだ??と一瞬、ムカツとした。

と同時に”やっぱりやってたかあ”と思った。

「何で、急にそんな事言うんだよ。俺、いつも太刀川にはちゃんとしてんじゃん」

すると太刀川は

「お前なあ、んじゃ先に金を渡せよ。つけがたまってる事忘れてんじやないか？」

さすがは太刀川だ自分の金に関しては几帳面だ。

波多もそれには納得してヨッシーからの売り上げを全部渡した。

波多は1万円だけ引いてくれないかと頼んだ。

すると太刀川が

「俺も兄貴にヤリで頼むのはいやなんだよな」

ヤリとは1回分程度(0.2g程)の量の物だ。

続けて太刀川が言った「そうだ井上と一緒に1万ずつ出して引けば？」

「ええ、そりゃ無いだろ」大体なんて言っつてこんな話するんだよ。」

太刀川は冷めた目で波多を見ながら

「しるか」

と言っつて缶コーヒを飲みながらタバコを吸い出した。

波多は考えた見た・・・が脳みそが空回りして何も思い付かない。そもそも腐っている脳みそだ何も出てくるはずがない。

困っている波多に太刀川が

「多分あいつ今日も少し効いてるぜ、帰つて来たら様子を見ながら言っつてみな。優しく話しかければ奴はのっつてくるぜ」

波多はこんな抽象的なアドバイスでやる気になった。

さすがは太刀川だシャブ中の波多など手にもかけずに操れる余裕が或るし井上に対してもあながち無理な読みではない。

太刀川は1人より2人の方が経済的な負担を分担できて回転率が上がる事を期待したし何よりも井上を自分の子分に引き入れたいのだ。3人のなかでは会社で一番下っ端の太刀川がそれ以外の所では逆転しようとしている。

一方の井上はシャブ歴の浅い男である、

自分が薬をコントロールしていると錯覚に落ちている。

しかし、すでに頭の中はミカとキメセクをする事でアタマがいつぱいになり始めていた。

野外、ハメ撮り（撮影）など愛より勝りかけていた。

愛は平常だが薬は異常なのだ理性ではなかなか押さえきれないのが現実かもしれない。

何も知らずに井上は会社に帰って来た。

墮落者の相談

井上は仕事に関しては多少の信頼を得ている。年令の割には愛想がよく遅刻などもあまりしないし多少の細かな事ならば気にしないからである。

しかし、トラックドライバーで工事現場に出入りしている人間が顔に傷を負って会社を休んだり、現場や会社にかけて遅刻をしたりしてその少しの信頼が揺るぎ始めていた。

尚かつ彼女との中も不安定である。まさに公私の両面で基盤が揺らいでいた。

原因は些細な邪心であった。

彼女の浮気を薬と言う悪魔のアイテムで復活させようとしたのが始まりだった。

しかし、それに気がつくにも薬の効果が完全に抜けて尚かつ打ち勝つ精神が必要だ。

とてもではないが今の井上にそれを出来るだけの精神力は無い。

井上が休憩室に入って来た。

太刀川と波多が話をしていたので太刀川の席の横に座った。

「おつかれ、こうちゃん」続けて波多が「おう」

「どうしたんですか？2人して何かの相談？」

井上が微笑みながら言ったがその顔にはまだ傷が残っている。

波多が「あのさぁ・・・」

「なに？どうかしました？」

井上は波多の口調の悪さから金を貸してくれと言われるか最近の遅

刻を咎められるか

どちらにしる自分の聞きたくない話を切り出されると勘違いした。

すると波多が続けて「うん、いや、顔の傷大丈夫かな」と思ってた
「さ」

なんとも切れの悪い会話が始まった。

「いや、大丈夫ですよ。ただの擦り傷だし軟膏やら塗ったら意外と早く治りそうです。」

「ああ〜ならよかった。井上は現場の監督さん達とも顔あわすからみんなに心配かけたらと思ってさあ。井上は社長も気に入ってるドライバーだから気をつけてよ」
と軽く笑った。

井上はやっぱり金か、じゃ無いと波多が優しい言葉をかけるはずが無い！と更に邪推が進んだ。

続けて波多が「おお、疲れて帰ったきて悪いなあ。コーラでいいか？」

と言うと波多が立ちコーラを自動販売機に買いに行った。

「波多さんどうしたんですか？」

と太刀川に聞くと少しイライラした顔をした太刀川が言った。

「いや、あいつねコウちゃん折半で薬を引きたいんだって」

「ええ〜そんな！太刀川さあ、俺の事言わないって言ったじゃん！」

「いや、その顔は見ればすぐ分るよ。俺言っていないしね。向こうが気がついてさあ、先に俺に言っ来てたんだよ。」と言って太刀川は波多の方を見た。

波多がおつりを取っていたその姿はまるで背中を丸めた子供の様にも見えた。

「いやあ、おつりがさあ全部100円玉で出てきやがったよ」といってコ・ラを渡した。

「すいません」といって受け取るとすかさず太刀川が

「おい、コウちゃんに話はしたよ後は自分で話せ」と威張って波多に言った。

社内では見慣れない光景に井上はこの2人の関係は想像より出来上がっていると感じた。

と同時に自分はどうなっては行けないと考えた。

波多が切り出した

「いや、大体は分ると思うけど薬代って意外と高かったりするじゃん？んでこれからは2人で出し合って買わない？俺さあ昔は知り合いに乗っからせてもらったけどそいつが連絡取れなくなって困ってたんだ。」

乗っかるとはみなでお金を出し合って薬を買う事だ。

井上は渋い顔をした。

金がかかると言われてもそこまでやるつもりは無いし、実際、波多はそんなに使ってるのかとびっくりした。まだ井上は自分はそこまでハマらないと思っっているのかも知れない。

続けて波多が「いや、毎回ではなくてね井上が必要なときだけいいんだ。」

正直、井上はYESともNOとも答えられない。

そこまで認識が薬の世界になじんでいない。

体は十分にその良さを知っているのだが頭が着いて来ていないのである。

しかも、多少薬の効き目で頭もボケていて深く考えるのがいやなのである。

感情的には嫌な雰囲気は有るが自分でも冷静な判断が出来ないのは

分っているので無難な答えをさがしていた。すると太刀川が言った。
「コウちゃん。別にいいんじゃないかね？コウちゃんの必要な時だけいいみたいだしさあ」

井上はそうだなと思い「ああそれでいいなら」と答えた。

しかし、太刀川は井上は強く押せば引くと分っていた。
すると今度は波多が

「早速今日なんかは？」

と問いかけてきた。正直言って驚いた。

今までそんなに仲が良くなかった訳でもないし、毎朝かるく話す程度の人間で

どちらかと言うと会社では俺が上の立場だぞ！という態度を取りたがる波多が

俺と同じ目線で会話をしている。

「いや今日はいいです」

せっかちなのでは無い。これが常習者の普通の考えだ。

薬の為ならどんな行動でも思い切りがよくなる。

社会的立場や信用など一気に乗り越えてしまう。しかし、それは刹那的だ。

井上は数日前にミカのいえのテレビに出ていた受刑者の話が頭をよぎった。

しかし、それ以上深くは考えなかった。

太刀川は補足と言う感じで話を始めた

「コウちゃん、だいたい0.2を毎回1万円は無理かもしれない。
1万円だと0.2程度だけど実際はもつと少ないんだよ。」

売人が小分けする時に誤魔化したりして減っちゃうからね。

でもね2万だと0.5は必ずあるから2人でもメリットはあるだろ

?割つても1人0.25はある。

し場合によつては1万円では売つてくれない事も有るから欲しい時に手に入らない事も有るんだよ」

井上には分つた様な分らない様なおかしな話である。

0.05つて小さな数字だな・・・

忘れてはいけない、シャブ中は小さな事には悪魔の様にこだわると言う事を。

墮落者の転落

井上は帰宅途中に太刀川だけでなく波多も信用できないと思いなから家路に着いた。

休憩室には波多と太刀川がまだ話をしていた。

「んじゃとりあえず1万円分だけ頼むよ」

波多が少し寂しそうに言った。

すると太刀川が金を受け取りながら言葉を吐く様に言う。

「あのなあ、毎回一万って訳には行かないんだぞ。しかもいつもの人に頼む訳には行かないからなあ」

と喋っている。

というよりも1万円では太刀川には儲けが出ないのである。

波多もそれは分っていたが井上が乗ってこなかったので仕方なく頼んだのである。

太刀川もいくら波多とは言え一応客であるなんとかしたいと言う気持ちはある。

しかし、計算が合わないのである。

儲けも無しであの田口に会うのは嫌なのである。

もともと詐欺師出身のおとこである金と行動のバランスはしっかり計算を行う癖が出来ている。

「波多。もし、これからも上質の物が欲しいなら今日はあきらめろ。俺の所の物は親分さんクラスが使ってる上物だ。そこに1万円分だけを頻繁に頼むと相手がめんどくさがって相手してくれなくなる」

波多は韓国人社長の平からも昔に引いた頃が有りそちらの方が上質だった事を知っている。

ゆえに太刀川のは言う程では無い事も分っていた。しかし、太刀川は自分しか居ないと思って調子のいい事を続けて言った。

「それだと波多が困るだろ？俺は別にシャブなんていらなんだし。これってボランテアなんだぜ。」

それにさあお前は俺が持つてくるシャブがいいとか悪いとかではなく、俺のシャブの癖が分つて来て他のは合わないかも知れないぞ。」

一口にシャブ（覚醒剤）といってもその化学式は様々で塩化アンフエタミンやフェニルアミノプロパン

にメタンフェタミンなど呼び方も組成も違う。ただ似た様な塩基配列をしているだけなのだ。

しかもシャブなんて所詮は違法薬物で品質に保証など無い。

何処かのヤクザが密輸しそれに混ぜ物（不純物）を入れて品質を落として重量を稼いで闇で流通させているのだ。

しかし、この不純物の割合と塩基配列の違いにより同じシャブでも癖が違つたりする事がある。

波多は太刀川のシャブの癖に慣れて逆にそのシャブに教育されてしまっていたのは確かである。

しかし、今の波多はそのような余裕は無い。

今日シャブが出来ると思いついていたのである。それが出来ないとなれば尋常ではなくなる。

しかし、太刀川に喰つてかかるのは不利である。

波多はあきらめたそぶりを見せて「分つたよ。今後の事も有るし今日はあきらめて帰つて寝るよ。」

と言うと「そうだね、たまには体を休めないとなあ。少し時間を空けると耐性（免疫のようなもの）」

も下がってまたききがよくなるかもよ」と言った。

しかし、太刀川は波多に1万円を返さない。

波多が金を返してくれと言おうとしたとき太刀川が

「さっきの金は利息で貰つとくね。ちゃんとツケから引いとくから」というと自分の財布を取り出しそれに移した。

さすがは太刀川だった最初から断るつもりで金を手中に収めていた。井上が断つてもとりあえず金は頂くと決めていたかのようだ。

財布に金を納めると太刀川は慌てる様に「んじやな」と席を立ち帰って行った。

波多は怒り心頭だが怒れない自分が居た。

シャブのツケが有るのも確かだし奴に歯向かうとシャブどころか小遣い稼ぎに使う大麻すら手に入らなくなる。波多はただ黙って見過ごすしか無いのだ。

墮落者の奴隷

太刀川と別れた後の波多は薬への欲求が抑えられなくなっていた。通勤に使っている原チャリに座ると暫く考えた。波多は友達が少ないので人のコネは期待できない。

抑えの利かない波多は勇気を出して平社長に電話を入れた。勿論だが平は簡単にはOKとは言わないだろう。

ブルルルルル・・・
ブルルルルル・・・

呼び出し音が長く感じた。

「はい、平です。」

「ああ、どうも波多ですが」
すると平はすぐに察した

「金とシャブならないぞ。」

波多は少し頼みにくくなった、先手を取られた感じがした。

「いや、社長あの違うんですよ。僕のじゃなくて『嘘付け！』
平が話を割った。

「みんなそう言うんだよ。もおうパターンだね。俺を騙すにももう
少し気が利いた嘘言えよ！その手の嘘はもう聞き飽きてんだよ。」
波多では歯が立たない

「いや、会社の奴がどうしてもって聞かないんで俺も止めとけとは
言っただんですけどね」

「ほお〜お前がかよ。それも笑える話じゃなガハハハハ」

「いや、今回は本当に止めたんですけどね、そいつもなかなか食
下がるもんで俺も困っちゃって」

すると平が言った

「んじゃそいつ連れてこいよ、困ってんだろ俺が説教してやる」

波多は慌てて「いや、そんな事を社長にはお願いできませんよ。」

「おい俺をなめるなよ、だいたいシャブ効いてる奴の話なんか誰が信用するんだよ」

と言つと電話が切られた。

波多は無知恵を振り絞っている・・・
しょうがないのでヨツシーに電話してみた。

「はい安部です」

「おうヨツシーか、お前今バイト中か？」

「ああ、波多さんすいません慌てて出たもんで誰か分りませんでした。」

「おう、んなことはいいからお前の連れでシャブ引ける奴居ないか？」

「ええ、あつちですか？いや居ないと思いますけど」

ヨツシーは大麻（草系）を愛好して居るので覚醒剤やコカインやLSDなどの薬（ケミカル系）をあつち系と呼んでいた。実際は覚醒剤とヘロインはケミカル系の中でも超強力なのでこの二つは敢えてケミカル系とは呼ばずにシャブやへ口と呼ぶ事が多い。

波多は強い口調で言った。

「お前に草引いてやつたる？その時関わってくれた若頭がさあどうしても組みにばれない様に引きたいって言って来てさあ、んで俺も断ったんだけど・・・」

ヨツシーは気の抜けた様な声で「はあ」と相づちの様な返事をした。
「そしたらその人がさあ、んじゃこないだ草を引いて来てやつた奴に探させる。そいつには貸しが出来てんだからな！って言い出しちゃつてお前を連れてこいだの探し出すだの言い出して往生してんだよ」

「まじっすか？それって俺・・・ヤバくないっすか？」

ヨッシーは本当に世間知らずだ。こんなはったりでビビってしまった。
ている。

波多は勢いに乗って続けた

「いや、ヤバイよ。んで俺もこの人の関係者には勿論、ヤクザ系には絶対聞けないのよ。何でかって言うとなー」

「なんでですか？他の組の人とかなら、ばれないんじゃないですか？」

「おいおい、俺のなあこの知り合いの若頭つてのはよ、こっちの世界では超有名人でな、それと仲がいい俺が聞いて回るとき、一発でばれるんだよ！この世界はせまいからなあ」
もはや波多のハツタリはとまらない。

「いや・・・うんちよつと考えてまた電話していいですか？友達とかに聞いて折り返します。」

「おう、そうしてくれ。ただ時間がないから急いでくれよ。俺もどれくらい時間稼げるかわかんないからな！」

そういうと波多は電話を切った。

波多も太刀川とつきあいだして少しは知恵が着いたようである。

とりあえず、波多は家に帰った。

家に着くと一目散にシャブを入れている箱を出した。

箱の中には今まで引いて来て空になったパケや注射器などが転がっていた。

今まで何度も空のパケを破いて隅々まで舐め回していたので空のパケの中も綺麗な物である。

それでも箱の隅や注射器の中などを細かく見ている。

時折時計を見ては「おせーなあーあの野郎！」

といいながらまた細かく箱の中をうかがっている。

帰って10分経っただろうか？

波多は1時間くらいたった感じがしてヨッシーに電話を入れた。

ツーツーツー・・・

話し中だった。

また箱を眺めて、電話してを繰り返し始めた。

まさに一日千秋の恋心だ。

シャブと言う悪魔に惚れ込んでしまっている。

弱者

ヨッシーは友達のウエムラに電話した。

「おうヨッシーどうした？」

ウエムラは派遣社員で昔の同僚だ、少しアングラ系の趣味が有りルトを持ってしていると睨んだ。

「ねえ、薬とかって手に入らない？」

ウエムラは驚きを隠せなかった。

「お前、止めとけて！もしかしてそんな事やってんの？」

「いやいや、違うよ。ただ、お前はそんな事しそうだから聞いてみただけ。」

「ふざけるなよ。大体俺がやるはずないだろ？それにあれってすごく金かかるらしいじゃん。お前の方こそ急にそんな事言いだして怪しいな」

ヨッシーは脅されて探しているとは言えないので

「いや、知り合いが薬してて捕まったもんでふとお前が心配になってなあ、捕まった奴もアングラ系の雑誌とか買いあさってたから」

「おいおい、何言ってるんだ？一緒にするなよ。しかし、それは寂しい事だな。心配してくれてありがとう」ウエムラとしてはどうでもいい事だが早く電話を切りたかった。

その後も数人に電話をいれたが入れたが電話をすればする程、廻りの信用を失って行った。

そしてヨッシーは後輩のシミ君に電話した。

「あ、安部さんすか？お疲れっす」

シミ君はフリーターで佐賀県出身の20代位前半だ。

「おうシミか？お前の知り合いでシャブ扱ってる奴いないか？」

「安部さんシャブやるんですか？」少し驚いた様子だ。

「いや、俺じゃね〜けどよ組関係の奴がいて俺に頼み込んでくるもんだから。」

さすがに後輩にも脅されて探しているとは言えない。

「そつすね〜、バイト先の奴なら居ますけど俺あんまり関わりたくないっすね」

人ごとである。シミはそもそもヨッシー（安部）のことをナメている。

ヨッシーは日頃から虚勢を張り、見栄を張り、口ばかりなのを見透かしている。

更にノリが軽すぎるのである。

井上が偶然、ヨッシーの店を訪れた時も軽いノリで井上に話しかけて来た様に

ヨッシーは軽いのである。

しかし、そんなヨッシーもいまは必死である。

「なあ、何とかならない？」

「いや、何とかって言われても僕がそいつに会いたくないんっすよねえ〜。」

「んじゃさあ、俺も着いて行っていいなら一緒に行くから。」

「いや、安部さん勘弁して下さいよ。」

「おい、俺とお前の付き合いじゃん。なんとかならね〜かなあ。」

なるはずがない、そもそも日頃から軽い（信用されていない）男の願い事など聞くだけ無駄である。

そはシミも感じていた。

ヨッシーは後輩に最後の手を使った

「おお、んじゃ俺今から組の奴にお前の事言うよ、お前が協力しないって。シャブ売ってくれる奴を隠してるってよ。」

するとシミが言った

「おう、言えよ。なんならそいつ連れてこいよ。」

シミはヨッシーを日頃から舐めておるので今更脅しには屈しなかった。

さすがはヨッシーだこの展開は読めていなかった。

というか行き当たりばったりで生きて来た彼には予想すら出来なかった。

しょうがないのでヨッシーは

「おい、お前が困った時に昔5千円貸してやったろ？飯だつてよく奢ってやったじゃん。今は俺が困つてんだから頼むよ。それにこんな事はお前にしか頼めないだろ？俺ってなかなか人を信用しないタイプだしさあ。」

今度は哀れみをことう作戦に出た。

彼はこの手でさんざん女を騙して来ただけあつて切り返しは早い。

シミは面倒くさくなり「ああ〜んじゃ少し待ってて下さい。それと今回だけですよ、後で連絡します」

というと一方的に電話が切れた。

するとすぐにヨッシーの電話が鳴った。波多である。

「てめえ〜何やってんだ。俺がどんな状況か分つてないようだな！

おお??？」

いきなりの怒鳴り声である。

ヨッシーは慌てて

「すみません、今ですなちよつと連絡待ちなんですよ。すぐに折り返しますから」

「あのなあそれならそうと連絡の一本ぐらい入れよ。」

波多はすでに兄貴分気取りである。

「はい、すみません。すぐに折り返しますから。」

「んじゃまってるからとにかく急げよ」

波多はヨッシーの言葉を聞いて少し安心したのか電話を切った。

ヨッシーは馬鹿正直に架空の親分に恐れをなして怯えていた。

ヨッシーの携帯が鳴ったシミからだ。

「ああ、量はどれくらいですか？」

肝心な事を聞いていなかった！ヨッシーは慌てて言った。

「少しでいいと思うよ」

シミは聞き返す

「少してやりですか？やりなら1万らしいですよ」

ヨッシーは訳が分らず「うん、そうだね」

と言ったがすぐに良かったのか悪かったのか迷いだした。

「んじゃもう一度連絡します」

と言ってシミが電話を切った。するとヨッシーは空かさず波多に電話を入れた

「おう、どうだ？」波多が聞くと

「ヤリ？って言うんですか？それなら有るそうです。」

「ほお、幾らだ？」

「1万です」

「お前1万有るか？立て替えておいてくれよ。こっち来た時払うから」

波多は金がなかった。なけなしの金を太刀川に吸い取られたばかりである。

しかし、ヨッシーもギリギリであった。

「すいません、手持ちがないんですよ」

「お前なあ、俺が今ココ離れる訳には行かないの分ってんだろ？なんとかしろよ。」

困ったもんである。ヨッシーは色々考えだした。

シミはさっきの様子からも払ってもらえそうにはない。

目の前には店のレジが有る。誘惑にかられた……

しかし、気が弱すぎるヨッシーは悔しそうに自分の財布を開いて札に目をやった……

悔しさで涙が出て来そうになった。

脅されて金を出す自分の弱さにだ。

しかし、この手の人間は何度も悔しさを経験しすぎて慣れっこのである。

この気持ちが発展する事は少ない。

本当に悔しければいま、この環境には居ないはずである。

すると、今度はシミから連絡が入った。

「ああ、今からいいそうです。なので店まで迎えに行きますねえ。」

「ああ、わかった。」と言うと電話はすぐに切れた。

ヨッシーは店には交代のバイトがくるまでいつも一人である。

”すぐに戻ります”と張り紙をし

店を勝手に閉めた。

買い物

ヨッシーはシミが迎えにくるのを通りに出て待っていた。

ヨッシーはいつも人の助手席にしか乗らない、というか乗れない。くるまの免許を取った事すらないからだ。30も後半になるうかと、言うのに情けない男である。

暫くするとシミが迎えにきた。

「ごめんね」と愛想笑いをしながらヨッシーは乗り込んだ。

シミが言う「金、ください。僕が取って来ますから」
冷めきっていた

するとヨッシーは自分の財布から1万円渡した。

「ねえ、どこまでいくの？」ヨッシーが聞くとしみはあっさり

「近所っす」とだけ答えた。

少し走るとシミが電話を شدした

「ああ、……そうっす、……わかりました。」

というところコンビ二の駐車場にくるまを入れて「乗って下さい。」
と、いって外に出た。

ヨッシーは初めて見る薬の売場に興味津々だったが気が小さいので
シミの行き先を

じつと見つめる事は出来なかった。

2〜3分待っただろうか、赤のくるまが入って来たと思うとシミの

横に付けた

横に付けたかと思うとすぐに行ってしまった。

時間にして10秒いたただろうか？一見すると、ただ赤い車が歩行者に気使つて一旦止まったようなものだったがすぐにシミがこちらに帰って来た。

乗り込むや「はい」と小さな茶色い封筒を渡された。

中を開けるとパケに入った袋があった。

出してみていると中には不揃いな岩塩の結晶の様な物が入っていた。

シミが慌てて言った「こんな所で出さないで下さいよ!!!」

ヨッシーは初めて見るシャブにいささか興奮していた。

いま、手に持っているもので一発で警察に捕まるんだという恐怖と
なんだか自分もワルになったという感情が入り乱れている。

「次回はありませんで、自分で探して下さいね。」
シミが念を押す。

しかし、それには答えずヨッシーは言った。

「俺、これを渡した相手がパクられたら俺もヤバくね？」

「あたりまえっしょ」「シミは少し呆れたと同時にその素人臭さが怖
かった。

ヨッシーの携帯が鳴っていた。

相手は察しがつくがシミの手前もあるので店に着いてから架け直そ
うと思ひ無視した。

シミがくるまを止めて「つきました」
と言うとヨッシーが「ごめんね、助かったよ」
といい車を出て運転席の方に回ろうとした。

しかし、シミはよっぱど呆れたのかヨッシーの続きの言葉を聞かずに車を出した。

少しイラツとしながらヨッシーは張り紙を外し店へと入った。

ヨッシーは先ほどの薬のやり取りの早さを思い出していた。

”思ったよりあっさり終わるもんだなあ”

又、電話が鳴った。

相手は波多だった。

「おい、どうだ？」

「はい、今手元にあります。でも……」

「でも、なんだよ！」

「今店を空けられないんですよ僕一人ですから」

波多は少し怒った口調で

「ああ？んじゃどうやって引きにいったんだ！」

波多も弱い奴には滅法強い奴である。

「いや、ですから今空けてたからっすね。」

「ああ、もういいや、んじゃ俺が取りに行くよ」

と言うと電話が切れた。

あれだけ離れられないと言っていた波多もシャブがあるとなると決断は早い。

ヨッシーは店の裏に行き小さな封筒からシャブを出し改めて眺めていた。

これやると廃人になるらしいなあ・・・
もし捕まったらやばいだろうなあ・・・
でも、これって効いたらどうなるんだろう・・・
少し、取っておいてもわかんないかなあ・・・
様々な想像が頭を巡っていた。

慌てん坊

波多はヨツシーに連絡をいれ終えると更に興奮が一気に高まった。体が不用意に震えている。

注射器を手に取りポケットに忍ばせた。

受け取ったらずくに注射をするつもりである。シャブに取り付かれるところさえ性が無くなる。

針が丸くなっているものは避けなければ行けない！

注射器も何度か使うと先端が丸くなり刺さりにくくなるので波多はたまに研いでした。

針を見比べようとキャップを外した。

なにげに蓋の裏に目があった。

何かの際に入り込んだのであろう奥の方に白くかすかな結晶が溜まっていた。

少し、儲けた気分になった。

原付にエンジンをかけるとヘルメットのヒモも締めずに出発した。

とにかく目先のシャブの事でいっぱいだった。

信号を無視して一方通行を逆走して安部の居る店へ急いだ。風を感じる余裕などないのである。

”ウウ”サイレンが鳴った。

「はい、前の原付の運転手さん左に寄って停車して下さい」

なんと！気がつけくと後ろにパトカーが付いていた。

タダでさえ破裂しそうな波多の心臓が余計に高鳴った。逃げ出そうかと考えたが所詮は原付。幹線道路から路地に逃げ込むまでには少し距離があった。応援を呼ばれると逃げ切れないだろうと思った。

あれこれ考えているうちにパトカーは真横に付けて窓から先で止まれと指で合図を送られていた。

仕方なく止まった。次の瞬間ミラーに見覚えの有るセダンが見えた。

パトカーから制服を着た警官が降りて来ると、すかさずハンドルをつかみ話しかけてきた

「運転手さん、そんなに急いで何処に行ってたの？標識見落としちゃった？」

「はい、つい急いじやって。すみません」

波多は心臓が飛び出しそうだ。

警官は続けて言う

「ちょっと免許証を見せてくれる」

ポケットには注射器が有る。慎重に財布を出して黙って免許証を渡した。

ミラーに再び目をやるともう一人の制服の警官が見覚えの有るセダンの運転席の男と話をしていた。

すると急いでその制服の警官がこちらにかけよって来て言った。

「最近ね傷害事件とか多いから一応ね持ち物を検査させてもらってるんだけどお兄さん危ない物とか持ってないよね？」

波多は少し落ち着いた”こいつら、薬の事なんかきにしてないなあ？”

と少し勘違いをした。

「はい、持ってませんよ。メットインの中も見ますか？」

するとセダンの運転席から私服の男が降りて来て少し遠目からこちらを見ている。

制服の警官が言った。

「一応、ポケットの中身をこれにだしてくれる？」

と言うと茶色くて四角い長方形の箱の様な物を目の前に出された。

波多は少し大きなこえで言った。

「ポケットに危ない物なんか入る訳ないじゃないですか」

すると警察官が腕をつかみ言う。

「危ないものって言うのはね薬物も入るんだよ。ちよつといいかなあ？」

というとポケットの上から手で触られた。

「ココに入ってる物出して」

波多はパニックになって黙り込みポケットに手を突っ込んだ。

するとセダンから降りて来た男が目の前に立ち警察手帳を出して波多のめにかざし言った。

「あるなら自分から出せ！」高圧的に怒鳴って来た。

波多は黙って手を出した。

そこには注射器が握られていた。

「おいおい、これも危ないもんだろ！何に使うんだ？」

「いえ、別にその『シャブやるが！』」波多が答えている途中で怒鳴られた。

「いえ、そんな事はありませんよ」波多は苦しい返答をした。

私服警官は黙って注射器を見上げてセダンの方に合図を送った。

するともう一人セダンの方から歩いて来た。なにやら制服の警官と話をしている。

この男は黙って波多を見ると

「注射器の蓋の内側良く見てみる、今からこの内側の結晶を採取するからな」

波多は聞いた事がなかった。シヤブは検査薬（試薬）に入れると紫に反応する。

しかし、通常そのシヤブはパケから微量採取し試薬に入れるのが通例である。

それを注射器の蓋の裏側に付いている超微量を試薬に入れると言うのは驚きである。

波多は怒鳴った「そんなの聞いた事ないんだけど！違法じゃね〜のか？」

私服警官が横目で見ながら言った。「シヤブじゃなきゃな」

すると先ほどの茶色い箱の上に名刺程の紙をだして注射器の赤い蓋の裏側にクリップの様な物を入れて掻き集めだし紙の上に少しの粉が出た。

それを試薬が入っている5cm程の透明な筒に入れた。

「いいかこれが紫に変わったらシヤブやぞ」

という筒の真ん中辺をペッキと折ると液と先ほどの粉が混ざりだした。

波多の額からは汗が流れ落ち瞳孔も開いていた。

色はすぐに紫に変化した。

「おい、なんやこれ。自分で言ってみ」私服警官が怒鳴った。

「覚醒剤です」波多は観念した。

すると同時にもう一人の私服警官が

「覚醒剤取り締まり法違反で現行犯逮捕する、16時30分や」と言って波多に手錠を架けた。

波多は状況を分析した。

見覚えの有るセダンは自分の内偵捜査をしていたのか。

それを知らずに機動隊のパトカーが偶然止めてしまったので

やむおえず降りて来てこんな微量で試薬検査して逮捕したのか。

波多は小声で言った

「そんな少量でも反応するんですね。」

初冬の手錠はとても冷たく感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5018i/>

僕と彼女 僕と葉

2011年1月20日03時04分発行